115

特219
538

常樂に生きる

悅びに生きる人の爲に
健康を欲する人の爲に
幸福を求むる人の爲に

内務省
15.8.-7
(普通出版)

始

特219
538

森川博祐 著

常樂に生きる

悦びに生きる人の爲に
健康を欲する人の爲に
幸福を求むる人の爲に

昭和十五年八月三日 内務省

序

何時の時代に限らず、人間は必らず求めて居るものがある。それが、「力」といふのか、「光」りといふのか、「宗教」といふのか求めて居る者自身にも明瞭に分らない。權威ある宗團は幾つも有るが、それがどうも求めて居る者の胸にピッたりとこない。教への表現が固型して、力の入れて欲しい處に一向力が這入つて居ないからである。さうかといつて組織と體裁が出來上つたものを、今更切り崩して、調子を下げるのはいかにも惜しい氣がするらしい。此の點からも、日本は非常時である。深遠な教理を平易な文字にもることは、いかにも困難、至難な事業である。でも誰かゞやりかけなかつたら、得體の知れない新興宗教へ皆走つて行つて、慌てゝ迷はされて仕まうのであらう。吾等の同心者が、二千六百年の記念事業として、今人の要求するせめて一部

面でも、充たし得るやうな單行本の出版を計畫して、私に相談せられた。自分としても年來の希望であるから、此の淨業に參加して、先づ第一卷の筆を把ることにした。いざ書いて見ると中々思つたのが出來ない。本篇には隨分、文字用語の生硬極まるものがあらう。又內容と表現文字とが一致しない點もあらう、それは第二卷、第三卷を出すに從つて修正して行くことにする。あれに似た、これに通つた所もあるであらう併し根本の信念は、「久遠」の信仰で一貫して居る。尠しも他によつて動搖せられるやうな薄弱なものではない。すべてのものゝ本家、宗家としての王座を失なつて居ないつもりである。まだ〳〵これでも、碎きやうが足りないと小言があらう。それも追つて直して行かう。此の單行本を讀んで、人生觀を一變し、健康と幸福の幾分でも得た者ありとすれば、刊行の目的は達する。自分が讀んで、慈味があつたら、必らず他の

人にも讀まして欲しい。それが廣宣流布の御手傳だ。有難いものは、必らず擴まらねばならぬ。又廣く弘まることによつて、一層有難くもなるのである。

本書刊行について、一乘會の會員諸彥が多大の盡力を各方面に煩はして下さつたことを深謝する。

昭和十五年五月廿八日

常樂莊にて

森川博祐

目次

一、生活篇

上々味の人生……（一）
幸福の生産地……（四）
歡喜と神通力……（七）
感謝の妙益……（一三）
家庭和樂の良藥……（一五）
合掌生活の妙諦……（二一）

二、宗教篇

「佛子」のさとり……（二五）
吾等に苦難ありや……（二七）

物の力を試せ……（三三）
神通力の生活化……（三七）
觀心する久遠の生命……（四一）

三、國家篇

國と人……（五五）
神の肇國……（五六）
八紘一宇……（五八）
東西相倚り……（六〇）
天業翼賛の臣道……（六一）

四、實證篇

「信行坐」の實修法……（六四）
治病の原理……（七一）

開運の工作……（八二）

五、修養篇

法の言葉…（聖語口語譯）……（八九）

一、御遺文より……（八九）

一、法句經より……（九五）

一、優婆塞戒經より……（九六）

一、法華經より……（九七）

一、生活篇

上々味の人生

人間の生活は「常樂に生きる」ことであるといつたら、素直にさう信じてくれる人が幾人あるでありませうか、中には何をいつて居るんだい。この非常時に、この經濟苦悶期に、五つや六つの子供でもあるまいし、と一顧に價しない言として、はき出すかも知れません。でも私は信ずる、人間生活は、常樂であり、常樂であるべき筈だといふことをです。

私どもの日常生活には、喧嘩もあります。貸倒れもあります。虚言もあります。人殺しもあり、病氣も、愛人の「死」もあります。それで居て私は「常樂に生き」られる信念を持つことが出來ました。信念は、人間生活の「味の素」であります。何んだ「信念」かと、讀まん先きに失望してはなりません。味の素は極少量であつても、吸物の味ひに、風味を變へるやうに、人間生活の味ひを變へる妙藥であります。「信念」よりは「黄金」だと、すぐいつてのける人も

あるでありませう。財産は、果して、人生生活の最上の味附けでありませうか。

流行着を買ふのも、夜會へ出るのも、戀人を嬉ばすのも、財の力です。財はある方面への人間生活を味付けしてくれます。それは、或は諸君より、私の方が、その味ひ方を喜んで居るのかも知れません。だがそんな味付けだけでは朝の刺味が、夕方に味が變つて食べられないやうに人生の味も變にかはつてしまふのであります。

酒や、好物や、戀で、人生の味付けをやるのは手取早いのであります。これこそ本當の人生の味なりとして、死物狂ひで、其の味を追つかけて居りますが、破産か、愛する者の「死」によつて一變にかはつてしまひます。

酒も甘味くない。芝居見ても苦しい。樂しんで聞いた音樂も耳ざはりだ。これは自分の妻を失ひ、子供を死なした人の體驗であります。

然らば最後に殘されて、しかも一切の人々には、忘れ去られて居る。「信念」は、はたして人生にどんな味つけをしてくれるのでありませうか、何時までたつても變らない味付け、嚙ばかむ程、味の出てくる味付け。そんな味付けがきつとあるのでせうか。無いものを有ると氣休め

に思つて居るのではありますまいか。

いや、全くあるのであります。事實嚴然と存して居る體驗であります。木や竹のやうになつたら死んでも、損をしても平氣だ！　そんな味付けをいふのではありません。そんな悟りなら地上から追出さねばなりません。

「信念」をもつといふことは、人間の智惠と「久遠の生命」の智惠とを入れ代へをすることであります。身體はこのまゝです。眼は、開いたこのまゝです。私どもに「潛在」する心を「久遠の生命」の心に代へて仕まふのであります。心の詰め代へ、智惠の轉換です。何んだそんなこと、もう分つた氣になつてはいけません。さう平易にさとれる問題ではありません。「失敗」「死」といふ悲痛な味も、一變するのでありますから、體驗が出來たら吃驚する程、恐ろしい程偉力のあるものでありますし、體驗しない者には糠を嚙む味程もない問題であります。こんな大事な人生「味の素」を忘れてしまつて、怒つたり、喧嘩したりして日を暮して居るのではありませんか、人間と猿とは毛が三本の違ひだといはれても仕方がありません。人々よ、光あれ、光明を求めよ、歡喜に生きよ、汝の久遠の生命を直視せよと叫ばずには居られません。

幸福の生産地

同信者に、櫻井さんといふ方があります。其人は歐洲大戰後に一躍三十萬圓の富を商賣によつて得られました。其の當時の感想をきくと甚だ愉快です。電車に乘つても道を歩いても、多くの人々が居るのに、其の人々か悉く爲すなき愚か者に見えたといふことです。此奴等何をグズ〳〵して居るのだらう、馬鹿々々しいと獨りでつぶやいたといふことです。其れ程自分は有頂天になつて居たのです。後から考へれば、自分こそ、大馬鹿の標本であつたのですか、其の當時は、それに氣が付きません。意氣揚々たるものでありました。ところが時は一回轉、大不況の荒天がやつて來ました。櫻井さんの事業も遂に挫折、全財産が泡になつて飛びました。その上に少なからぬ損失まで出來てしまつたといふのであります。今日でも時折同じ反省の言葉が繰返されますが、今日の「信念」が、あの時にあつたならあゝした惨な失敗はしなかつたであらうと。只今の櫻井さんは、正しい因と正しい緣とによつて、物質的な幸福條件を得るべ

く精進して居られます。全くその尊い精進の姿こそ、幸福そのものではありませんか、精進は幸福の因であります。因があれば必らず果實は結びます。たゞ櫻井さんは、天の運りの緣を待てばよろしいのであります。天の運りと、吾れからの寄付き、これが合致して、結果が結ばれるのであります「信念」は、かゝる緣を結ぶ無形の紐であります。

又同信の山本さんは、學生中隨分放縱でありました。好きなものは、酒と芝居、嫌なものは親の意見と、宗教、かうきつばりいつて除けて居たのでありました。所が養家が、純信仰の家でありまして、十四五人も青年信仰家が始終寄集つて來て居つたものですから、自然同信の中間入りをして、それから、讀經修行も熱心にする。研究もする。法華の純信仰に生きて、好きな、酒も煙草もいつとはなしに止んでしまつて、今では家庭も和合、親子圓滿、本家分家も融合一體となつて、營業は日進日歩の發展、物心一如の幸福な生活を送り、又時局に際しては社會國家の爲に奉仕赤誠の努力を捧げられて居ります。これなどは信仰なくしては、見られない家庭淨化の風光です。

又、同信の瀬尾さんは、不治の肺病にかゝり、菊地さんは、長年の眼疾で、醫師には不治の

病と見放されたのでありましたが、瀬尾さんは、一ヶ年後には死ぬと言はれたのが治つてしまひ、菊地さんの眼も治りました。眞に心から正しい信仰に入り久遠生命の信念に生きて死んでもよい、不治でもかまはぬ、死ぬのなら有難い信仰を得て嬉んで死んで行きたい。眼が見えんでもかまはぬ、見る樂しみよりも、信仰の心の樂しみを得させて頂きたい、といふ念願のもとに信仰をつゞけたのです。全く御利益です。お二人とも全く健全になられて、只今では事業家として奮闘して見えます。

私どもの法華信仰は、何か憑物がある。障りがあるとして、讀經祈禱によつて、治すのではありません。唱題修行を修行いたしまして、久遠の生命の、正しき信念を證らして頂くことによつて、不思議の功徳力を體驗して治すのであります。自分の信念で自分が直すのが本意でありまして、其れに至る迄、私が指導するのであります「如來秘密神通の力」の公開であります別に傳授料を求めません。諸君が體得して下さつたら不治の病も治り、不幸の條件も除かれます。

歡喜の神通力

笑は、心身の良藥であり、怒りは、身體の毒藥であります。憤怒、激怒が吾々の身體にアドレナリンといふ毒素を生じ、それが血管に流れ込んで、身體健康を害することは誰も知る事實であります。笑ふことが、消化液を分泌して身體の血行をよくし、營養攝取を自然によくすることは今日の醫學上に證明せられて居る事實であります。吾等は三百六十五日、一家笑ふて暮したいのは誰もが希望する所でありますが、多くはこれと反對に、年中、思つたり悲しんだり苦にしたりして暮して居る人が多いのであります。感覺的な笑ひなら、漫才でも結構、笑はぬよりはましでせう。ニガ笑ひ、泣き笑ひ、マギレ笑ひであつては、心地明朗ではありません。實に精神の笑で心の笑ひは久遠の生命の信念による笑でなくてはなりません。

經文には「皆大歡喜」といふ文字が、諸處に書かれてありまして、佛陀の說法を聞いた、佛弟子共が、いかに樂しく笑つて嬉んだかといふことがわかるのであります。精神的な、內心か

ら自然に湧いてくる笑ひであり喜悅であります。

人は誰でも、物を得たとき、欲望を滿足したときに、笑ひ、嬉び、樂しみを感ずるものであります。着物が出來た、新築が出來た、音樂會に行つた、名所見物をした、美味しいものを食つた、花見にいつた、皆嬉びでありませう。笑ひであります。しかし考へて御覽なさい。この笑ひには、心配や苦病や怒りの裏うちがあつて時には、不幸や、病氣の原因となる場合すらあるのであります。

精神的な喜悅、宗教的な高い笑ひは、永久性、無限性を以つた歡喜であります「歡喜踊躍」と經文にあつて、踊り上る程の滿足歡喜の笑ひであります。

「此經は人の病の良藥なり」（法華經）

とありまして、信仰は心の藥であるのみでなく、全く病氣の爲の良藥であるのであります。幾多の事實は、それを明らかに證明してくれるのです。

吾々はものを施すときとにも愉悅を感じます。しかし物には限りがありまして、得るにも、施すにも、限ぎられて來るのです。そこで、無限な心を以つて、有限な品物をつゝんで「物心

一如」の施しをして御覽なさい。そこに眞の愉悅歡喜を感じます。與へる者も、與へらるゝものも、無限上味の歡びを感じます。久遠の生命の「神通力」が現はれて、悅ばして頂く「體驗」を得るのであります。

あるお嫁さんが嫁づいでから三日目の朝お姑さんが椽側へ出て、朝顏の花を見て居られました。綺麗に咲いて居るものですから「一寸靜子さん、こゝへ來て朝顏を見て御覽、綺麗ですよ」と招きました。

お嫁さんは、ハイと直ぐにお姑さんの側へ寄り添ふて朝顏の花を見せて頂いた。なる程綺麗な朝顏の花でありました。でもお嫁さんは朝顏の綺麗な花よりも、お姑さんの親切な心を、温かく、嬉しく、無上に感じたのであります。今日迄の淋しさに比べ、一時に嬉しくなつて心に歡喜の花が一遍に咲いたのであります。

それからといふものは、お姑さんとお嫁さんの中には、歡ぶことのみが多く湧いて來て、生家よりも樂しい家庭を作ることが出來ました。嬉びは歡びを產み、笑ひは笑ひを產む、類は類をもつて集るで、一つの歡喜は、それからそれへと、幸福と嬉びとを產む「神通力を」もつて

居るのであります。

双の下に坐して歡ばれたのが日蓮上人の龍口の法難です。

「これ程の悦びを笑へかし」

恐らく其の當時に、上人以外の人々には此の言葉の意味は十分わからなかつたであらうと思はれます。法華經の文を活さん爲めの「死」、國柱の誓願をはたさん爲の「死」、「一切衆生を救はん爲の「死」、この死は上人の前には決して悲しむべきことではなく、たしかに嬉ぶべきの「死」であつたのであります。此の歡喜こそ、人間生活に於ける一大不思議の歡喜であります。「久遠の本佛」が頭に宿つて、「笑へかし」といはれた歡喜、喜悦なのですから人間經驗の笑ひでなく、浮べの笑ひでないといふことも明らかです。此の笑びこそ「神通力」まで起さしめた笑ひでありました。「久遠の生命」の魂を得た人でなくてはできない笑ひであります。

同信の平井さんは、たつた一人娘のお子さんを死なかしました。高女も卒業し、立派な青年紳士を婿養子に迎へるといふ日取りまで決つて居つたのに、たつた一週間の病氣で死んで行つたのです。お母さんの悲しみほどんなでせうか。天地が一變にひつくり返つたやうな悲しみです。いくら泣いても、泣き切れません。あまり泣いたので胸がふさがりさうになつて、親類の人は、病氣にならしないかと心配しました。人が慰さめてくれると餘計に悲しい。諦らめの言葉をきくと、却つて憎らしい。一日中泣かして放つて置いてもらつた方が一番ましだといふ程であります。五七日も過ぎ、七七日も經つてから、友人が見兼ねて、宗教へと導いたのであります。時節當來して居たものか、すなほに信仰に入つて「久遠の生命」の「お力」、「お智恵」「御惠みといふものを信仰できるやうになりました。日時の經過も藥であつたのでありませう。今では、光明ある笑ひを取戻して見えます。此の笑の底には、如來の「神通力」が祕められて居るのではありませんか、「神通力」が私どもの日常生活に交渉をもつのはこゝです。神秘的な行事にばかり扱つて居ては、尊い寶の持腐れであります。「信念」は、生活の本體です。生活の味の變つたのは、信念の本體が變つたからであります。

歡喜生活には、不平も、怒りも起りません。不平を去らう。怒りを押へやうとする努力の生活よりも、先づ歡喜して生活しなさい。不思議に、不平と怒りと悲しみは消えます。怒るまい泣くまい、とする努力は、要するに骨折損に終ります。それよりも先づ歡喜の生活を始めるの

です。必らず不平、憤怒は、煙の如く消えて行きます。「信念」は歡喜を生じ、神通力を生じます。拜んでばかり居て、一向歡喜心の起らない人は、何處か信念の持ち方に缺陷があるのであります。信心は何よりも、一番樂しいもの、歡ばしいものであることを體驗しなくてはなりません。

感謝の妙益

感謝は人生の光明であります。感謝の光明が投げられる所には、人は必らず滿足と、嬉びとを感じます。感謝の前には、怒りの双も双が立ちません。感謝は、人生の輝きです。感謝されたときに、其の人の顏は輝いて居ります。眞にうれしさうに見えます。うれしさは、又うれしさを投げ返します。感謝して、感謝され、嬉んでは嬉ばれ、精神の波紋は波紋を傳へて行きます。不平、愚痴は、感謝の爆彈によつて、吹き飛ばされてしまいます。感謝する人も、される人も共に幸福なのであります。丁度網の目を引くやうに、感謝といふ綱を引けば、歡喜といふ

目も、報恩といふ網目も、幸福といふ目も、ともに隨伴て來るのであります。けれども不平、不滿、不幸、怒り、憎しみといふのは、別の系統に屬する網の目ですから、却つて逃げて行くのであります。光が來れば、闇は自から去るやうに。物は使へば、使つただけづゝ減つて行きますが、心の理法は、與へれば與へるだけ餘計に湧き、使へば使ふ程、無限に給與をうけるのであります。物のうちでも、泉だけは、使つたら使つただけ、水はいくらでも湧いて來ます。永らく汲まぬと、遂に泉の水は湧出なくさへなります。吾々は感謝をすれば、する程久遠の生命より、無限の給與をうけるのであります。もし感謝することを忘れ怠つたら、却つて無限の給與は止るのであります。

大聖日蓮は、久遠本佛の慈悲の一面として「無作無緣の慈悲」といふことを信ぜられました誰も作つた者がないから無作です。又緣も無いものに、無限の慈悲が與へられて居るのだから無緣の慈悲です。久遠の生命は吾等に無限の慈悲を供給せられて居るのだと信ぜられたのであります。寒さに煖、暑さに涼風、渴して水を、皆要求のない所に自然に惠まれて居るではありませんか。敵も味方も、正も邪も、皆等しく、平等の慈悲につまれてこの擴大なる給與をうけ

て居るのであります。

怒りの心の窓には、地獄界が窺きに來ます。貪る心の窓には、餓鬼界が飛込みます。嬉ぶ心の窓には、天人が訪れます。感謝の心の窓には、佛か菩薩が、這入つて來られるのであります感謝は幸福の窓であり、報恩は、歡喜の玄關であります。吾等は今久遠本佛の信によつて、常樂に生きる實證を示して頂いたのであります。嬉ばずには居られず感謝を捧げずには居られないのであります。

日蓮大聖は、北海寒山、佐渡ケ島の三昧堂、極寒、雪中に在つて、

「此の所即是れ道場なり、諸佛此に於いて法輪を轉じ、諸佛此に於いて涅槃し給ふ」と感謝報恩の御題目を唱へられました。鍋かむり日親上人は、五寸釘を四方から打込んだ一間四方の牢獄の中に投ぜられても、「此の所靈山なり」と信じられて居たのであります。大聖日蓮、聖者日親に在つては、肉體の歡び以上靈體の悅びに生きて居られたればこそ、遠島も、牢屋も、淨土、佛國であつたのであります。久遠の本佛と共に生き、久遠の靈體につゝまれ、本佛生命に融け合つた人間ならでは、此の法悅、感謝は、味解出來ません。此の信境を體達して、「久

遠の靈體」我れに生き給へりの實證體驗を得たる人には、只今の生活が、神通であり、日常の動作か、自在なのであります。「如來秘密」とは「久遠の本佛」「の眞理實在」と「大智光明」と、大慈救濟との三身の德を第一念信の上に開驗するのであります。その秘密を開くのが信のかぎです。智惠ではありません。「眞理」と「慈悲」と「智惠」とを、融合和した良藥でありますから、信によつて服むのであります。これを「深心解」といひます。此の功力は、人間性格をすら「轉回」させます。人生觀を一轉せしめ、自行から化他に轉向せしめる大功德力を有して居るのであります。

家庭和樂の良藥

同信の人、ある奧樣の告白です。良人は院長さんです。病院の經營もよろしく、若い美しい看護婦に心身の奉仕も惠まれて、良人の愛情は二つになつたのであります。で本宅へも歸らぬ夜が多くなり奧樣は、淋しい寢ざめに神經も針の如くとがるのでありました。それが原因か、

奥さんの健康はすぐれずして半病人、寢たり起きたりして、苦悶の中に日を送つて居られました。此の不快の念が、良人にうつつて、良人の歸宅がだん〳〵遠のいて行くのです。たまに歸つて來ても、不快な顏をして、誰が口をきくものかといつた態度ですから、良人は益々面白くない。死んで仕まいたい。「死ね」そんなら死ぬ藥をやらうといつたいきさつ。奥樣は遂に絶對絶命の氣持ちにまで追ひやられてしまいました。或日遂に死なふと決心して、毒藥を呑まうとしたさうです。そこへ東京の姉さんが、前ぶれもなく突然訪れたのであります。死ぬにも死ねません。毒藥は引出しへ蔭され、眞青な顏をして、魂の拔け切つた人間のやうな格好で、火鉢にもたれて居たのであります。

貴女どうしたの？。私死にたいの！まあどうして？。かくして一切は物語られた。それでは仕方がない、私の所へ歸つてお出でなさい。私引き受けるわ、遠慮なんかいらないよ。だが貴女、もう一度考へて見ないこと、私も病氣で困つて居たのが、法華經の信仰をすゝめられて、治つたのよ。それから、心ががらりと變つたわ、今では、感謝と、歡喜で日々樂しく日を送らして頂いて居るわ。信心のお蔭で病氣も治り、又良人とも、仲よしになつたのよ、子供も善良

になつて來ました。貴女も信心をして見ないこと、好かぬかもしらんが、良人と別れたり、死んだりするより增しだわ。增しどころぢやないよ。本當の信心を悟つたら、有難いことがいくらでもあるわ。

女人が成佛したといふ提婆品といふ御經があるの、其の中に「志意和雅」といふ御言葉があつて、それは婦人の守本尊ともすべき御經文なのよ。貴女良人に心から、和合しよう、融和しようと念じたことある？。また雅しくしようと念願したことあるの？。ないでせう。それがいけないぢやないの。貴女の身體の外に、貴女の靈體があるの、久遠の生命につながる。私達が肉體だと見て居る姿も、これは五官を通して映つて居る假りの姿で、本物の私はもつと見えない部面にもあるといふことだわ。それが「靈體」「本體」「本當の自分」なのよ。その「靈體」と、良人の「靈」とは、相通じて居るものですから、貴女が、良人を嫌へば、靈は感應して、良人にも、嫌いだといふ念が、感受するのださうです。さあ、靈と靈とは思念が相通じ、お互の態度には、明瞭にそれが現はれる。だから互に彈き合つて仕まふぢないの、和合しよう。温雅にしようとしたら、此度は反對に、良人を引付け、自分も、引き付けられるのですよ。信心

しない人は、此の潜在して居る心の偉大なる力を信じないのですね。「久遠生命」を信仰すると「神通力」といふ功德力がキット現はれるの「絶對の神」、「久遠本佛」同じことです。「壽量の本尊」ですね。その神に通ずるから、本佛の力が、私等にも現はれるのよ、私も隨分不思議な御利益を頂きましたわ。

子供の百日咳で惡るかつたとき、私は、心の中で壽量の佛がわが心の中に現じ給へり「今此の神通力によりて、病治るべし」と、口にお題目を唱へて、祈念してやると、たつた五日で咳が止まつてしまひました。貴女もキット利益が頂けるから、信心なさいね。合掌端座して、我が信仰の一念に「久遠壽量の本尊」顯現したまへりと、信ずるのです。御主人の心靈にも通じます。そこが神通力です。かくて姉さんの信仰にはげまされて、靜子さんは遂に信仰の人となりました。

良人はそれから二三日後にふと歸つて來ましたが、いつものやうに、直ぐ戻つて行かうともしません。「大變家をあけて濟まなかつたなア」と言葉も平日とは違つて出てくる。靜子さんも、今迄の自分の惡るかつたことを良人に懺悔する。死なふとまで決心した家庭が、それから

春風胎湯として、平和、温愛に滿ちた家庭となつたのであります。

家庭は、安息所であり、避難所であります。男子が社會にあつて、惡戰苦鬪、心身を綿の如くに疲勞して歸つて來ても、我家に入つて、やれ〳〵と落付くときに、すつかり疲れも慰えて明日出勤の力が生ずるのであります。大船小舟が波濤に弄せらるゝやうに、男子も時々は誘惑にかゝるのであります。

しかし船が港に入れば、安心なやうに、吾等も、家庭に入れば、いかなる誘惑も家庭の城壁まで越えて侵入はして來ません。家庭は安樂所であります。何故安樂所でありませうか。母の慈愛と、妻の「和雅な心」に包まれて居るからであります。一人の犠牲は、家族全體を活かす力を有ちます。

法華經に、藥王菩薩が、自分の身を燒いて燈明とし佛に供養したといふ話が說かれてありますが、それはかういふ說話であります。

釋迦無尼世尊が、娑婆世界にをつて法華經を說かれて一切衆生を教化して居られるので、藥王菩薩は、東方の國に居られたのだけれども、遙々娑婆世界を訪づれ、佛樣に御供養を捧げや

うと、多くの弟子を連れて、お出でになつたのであります。説かれる話が、最勝至極の法華經であるから、最上の供養を捧げんとて、我が身を燒いて一大燈明として捧げんと、決心されたのであります。それから香油を身に塗り身體にも呑んで、佛前にあつて、大燈明と化して供養し奉つたのであります。一切の佛、菩薩はこの最上の供養を見て、讃歎せざるものは無かつたのであります。藥王菩薩の臂は遂に燒けてしまいました。けれども、燒けた後には、金色の臂が、新らしく出來て居たといふのであります。

母の肉身は、犧牲に見えませう。けれども母の靈體は、金剛不滅身であることを顯現して居るのであります。母の「奉仕供養」が、家庭をして安樂所たらしめ安息所たらしめ避難所たらしめるのであります。その「神通力」こそ、信の一念から、發せられるのであります。社會を淨化するのも、家庭の力からです。國策に添ふ力も、家庭からです。國運扶翼の力も家庭の力からです。さうした家庭和樂の根元は、信念から發する「神通力」によることを確信しなければなりません。

合掌生活の妙諦

十指合掌の生活とは、異體同心の生活であり、一家和合の生活であり、國を家とした生活であり、世界を一宇とした生活であります。

十本の指はそれ〴〵の役目をもつて働く指でありますが、合掌すれば一體となつて、一種の靈光を放射して居るのであります。合掌は十本の指を一體として、靈化する姿勢であります。人は各々使命を持ち、天分をもち、役目をもつて居ります。父は父として、母は母として、子供は子供としての本分があります。或る人が一家和合の秘訣をたづねたときに「らしくせよ」と教へたといふことであります。父は父らしく、母は母らしく、嫁は嫁らしくすれば、一家圓滿に和合するといふのであります。「らしくする」ところに、和合の秘訣があるのであります

「らしく」は異體であり、「和合」は同心一體であります。

また合掌の生活は、拜む生活であり、祈る生活であり、感謝の生活であり、求道の生活であ

り、靈化の生活であります。

人が、佛を拜むところに、敬虔の心が充たされます。また人が人を拜むときに、人間生活の「靈化」が行はれるのであります。

大阪市東淀川區の春木さんの家庭は、今は昔となつた話でありますけれども、よく世間にもある、姑と嫁の中が犬猿であつたといふ實際談があります。或る時、姑さんが風邪で床についた。平生は嫁の世話にならぬといつて居つたが、病氣では勝てない。御嫁さんは、此時ぞといはんばかりに優勢を示す。或るとき、振出藥を煎じてもつて行つた。姑さんはそれを呑むと一變に、胸が引締められるやうに苦しくなつて來た。呑んだ煎藥を皆吐出してしまつた。胸が惡い苦しい、お腹がいたむ。嫁はわしに毒を入れて呑ましよつたのや、わしを殺してしまふつもりぢや、あゝ恐ろしい、とわめきだしたのでん嫁さんはだまつて居られません。なんぼ私でもそんな恐ろしいことをしますかいな、世間へ聞へたら、よい恥や、よしとくなはれ、と泣いて悔しがつた。主人の仲裁では治まらない。　松山さんを呼んで來て、其場をおさめてもらつたのであります。

松山さんは、お嫁さんに向つて、先づ貴女の心掛がいかぬ。「でもお母さんがあんな……」まあ私のいふことを聞きなはれ。なる程貴女は毒をもらなかつたやらう。又そんな阿呆らしいことをする者もあるまい。だが毒をもつてやらうと思ふ心は、今迄にも幾度かあつたやらうなその貴女の念は恐ろしいものぢや。さうして姑さんも、わしに毒でも呑ましよらせんかとたことも度々あつたやらう。その念と、念とが藥をも毒に感ぜしめてしまつたのぢやなアる醫者が、持合せの藥がなかつたから、メリケン粉を、大そうらしく紙につゝんで、これは向貴藥だから呑んだら直きに治るといつて與へた。患者は、其の醫者を信賴して居たから、全く高貴藥だと信じて呑んだ。非常な効果が現れた。今度往診に行つたとき、あのお藥はよく効きましたと御禮をいつたといふ實際話がある。貴女も、毒でも呑してやりたいと思ひ、姑さんも毒を呑ましやせんかと思つたときに、煎藥も、毒藥にならうぢやないか。そんな睨み合の心で暮して居て仕合せやと思ふかな。今日から改めなさい。御先祖の前で、懺悔しなさい。今晩から一週間、唱題修行の後で、私が惡るうございました。と懺悔するのぢや、さうしたら、一週間の中にきつと佛さまが、本當の仲直りをさして下さる、さうしなさいと教へて歸つた。お

嫁さんの懺悔一週間は、四日目に忽ち「神通力」が現はれて寢て居たお姑さんは、起き上つて寶前へ詣り、お嫁さんが信心して居るそばへ坐つて、嫁やわしが惡るかつたのぢや、許してくれ、今日といふ今日からわしも改める。生れ變る。さうして一家圓滿にやらう。おゝさうしておくれといつて、一家の和合が出來たのでありました。睨み合の生活から、拜み合ふ合掌の生活に入つて、家庭淨土は實現したのであります。

拜む心を向けるから、人にも拜まれ、感謝する心を向けるから、人にも感謝され、施す心を向けるから、人からも施され、願ふ心、求むる心を向けるから、佛の心が與へられ、佛の道がけられるのであります。吾々は、外に拜んで、あらゆるものゝ中に一番尊い御本尊を仰ぎ、拜んで、其の御本尊が、吾々の心の主であり、師であり、親であることを悟らねばなりません。

二、宗教篇

「佛子」のさゝこり

近時、新興の宗教結社では「人間は神の子である」といふことを頗る昂揚して居るやうでありますが、法華經の中には、吾等を指して「是れ眞の佛子なり」と三千年以前に喝破せられてあるのであります。

「佛子」とは、どんな人間に名づけたのか。人間は人間でよい、特に「佛の子」などゝ特別な名稱をつけられなくともやつぱり人間でよいのだと得意になつて居る人もあることでせう。

然るに、命がけで人間は「神の子」である。「佛の子」であると叫んで、難を招いたり、自から求めて死地についた人も尠くありません。故に吾等は、人間の「死」そのものよりも、もつと大きな問題だといふことを悟らねばなりません。

往昔、不輕菩薩といふ方があつて、あまり御經などは讀まずに、專ら人々に向つて、禮拜讃歎したといふことであります。

「我深く汝等を敬ふ……所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、當に作佛することを得べし」と唱へて、こと更に、人々の居る所へ往つて、禮拜したといふのであります。すると拜された連中は、薄氣味が惡くなつて、心の曲つた者は、むしろ瞋恚を生じて、さやうな僞りの「授記」はうけないぞと或は杖をもつて打ち、石瓦を投げたというのであります。「授記」といふのは、諸君等は「佛に成る人々だ」といふ允可、賞揚することです。不輕菩薩は、石瓦を飛ばされて、遠くへ逃げ去つては、猶高聲に「汝等皆當に作佛すべし」と唱へて禮拜行を專らとしたといふことであります。常に人々を輕んじない。「神の子」「佛子」として、禮拜し、讃歎し、尊敬したといふ方であつたから、不輕菩薩といふ名を以つて呼ばれたといふことであります。

人間を「ド畜生」と見るか、「佛子」と見るか、これは、人間生活に於いて最も重且大なる問題なのであります。御覽なさい。「ド畜生」といはれて、怒らない人がどこにありますか。親子、夫婦の中でも、「此野郎」とか「ド畜生」といはれたら、誰でも腹が立つこと必まつて

居るのであります。然るに君は「佛子」だといはれても一向喜ぶ人はない。それが今日の人々の風潮です。むしろ、「佛さまだ！」といはれると、勘違ひして、まだ己が佛になるものか、死んでたまるかい。或は、そんなお人好しだと思つて居やがるのかいと怒り出す人が多いのであります。だから、「佛子だ」といふ本當の意味は、今日の人々には、全く解つて居ないと申さねばなりません。

で「佛子」と、普通人とは一體何處が違ふのでありませうか。放つて置けない問題ぢやありませんか。

吾等に苦難ありや

吾等が苦難だと思つて居ることはどんなことであらうか。失戀の惱みも苦であらう、睨合も苦であり、失敗も苦であり、病も、死も苦であらう。人間生活には餘り苦が多すぎる。「失戀」「破產」「病」「震災」「死」「離別」などが多すぎるのであります。地上の聖者といはれる、釋尊

や、日蓮や、キリストなどにも、幾多の災害「法難」がありました。むしろ普通人よりは苦難は多かつたのです。然らば、「佛子」とさとつた者にも、結局は、不幸も、災害もあるのであつて、普通人と何處も變つた所がないぢやないかと、いふ人もあります。しかし此處をよく悟らねばなりません。此は普通人が見た聖者でありまして、聖者自からが聖者の心境を觀た人間ではありません。一般の人々か、一般的な眼鏡をかけて見た釋尊、キリスト、ソクラテスでありまして、釋尊や日蓮が、自から悟つた心境の眼鏡を通して見た人間ではないのであります。聖者と人間とを批較して觀た姿でありまして、聖者自身が靈者たる所以を觀た姿ではないのであります。いはゞ人間を相對して、甲と乙と丙とを比べて觀た評價でありまして、絶對的の立場から見た姿ではないのであります。「佛子」は「佛眼」、「神眼」から見た人間其のものゝ絶對的の觀方であります。富豪の息子は、餘りにも人間的な幸福に滿たされて生きて居る。「神の子」だといふ某には、餘りにも、慘めな生活振りではないかと批較評價しても、それは「佛子」の本格の上に何等の痛痒も感じないのであります。相對的な立場に立つから、物質的條件で、眞價が狂つてくるのであります。キリストは、キリスト自からの立場に立つて「神の子」と名乘

り、自からが絶對的立場に立つて我れ久遠の佛陀なりと、大覺せられたのでありました。

先日私はある舞踊會へ參りました。左右兩方からは照明がてらされて居りまして、右の方からは赤い光線左の方からは黄色の光線で照らされて居るのであります。兩方の光線で照し出された姿を見ると、踊り子の全身が浮び出て、或は赤に或は黄色に甚だ綺麗に見えたのであります。しかるにそれを、赤の光線の方だけを見て人間の姿と思ひ、又黄色の光線で照された方だけを見て、人間の姿だと思ふのは、實物と相違した形を把へて居るのであります。失戀は深刻なる苦惱であります。

しかし苦惱は、何を生み出しませうか。苦惱を嚙みしめることによつて、今迄に想見も出來なかつた靈光が觀られる人があります。苦惱の爲に、失望落膽する凡人も多いのであります。失戀とは人間の一面的な失望ですが、ダンテの如く失戀によつて却つて永久的な精神的な眞實の愛を得た人もあります。苦惱の裏がすぐ靈光の表です。「苦惱人間」の玄關口は、「常樂天人」の本堂と一つであります。儲けた上にも儲られる人は幸運です。誰も羨ましい。だがそんな人は物質財の滿足心が生む憍慢心で、心的の自分が觀えません。生涯一方からの光線で得意の生

活を送る人です。死こそ人生の最大悲痛事です。死は死であつて死を蘇生せしむる術はありません。死は永別であり、人生最後の幕切れです。何と考へても、何と運動しても取返しのつかぬ決定事です。だが、「死」は人間に不幸と、悲觀とを與へる外何物も齎らさないでせうか。

吾等の間違つた人生觀を、安心を、根本的に打破してくれる爆彈とはなりますまいか。自分にとつて餘りにも高價な犧牲彈です。併し死は死であるが、死に面しても吾が常樂生活の道があることを看取しなくてはなりません。草木の一葉が散つたのにも、悟りを開く契機と見た人もあります。死によつて無我となつて、「佛子」の我れが觀られるのであります。久遠の私がそこに發見せられねばなりません。久遠生き通しの生命が發見されてこそ「死」が本當に解決されたときであります。「久遠の生命」の悟りの座に自分が就くから「死んだ愛子」にも則是道場で會へるのです。死んだ愛妻にも遭へるのであります。久遠生き通しの自分、永遠不滅の我が全身が開顯し得られたら、死の悲痛な苦しみは、一變して來ます。毎日「久遠生命」の海に於いて、會合し、面談して居ることが可能なのであります。佛子の體驗なき人には、この實證を示すのにやゝ困難でもありませうが、私の同信の人々中には、「久遠本佛」の信仰に蘇生して、

此の死の問題を解決した人が澤山あるのであります。「死んだ者は損や」と世間に常用される言葉は、爭に、物の人としての人間、感覺的人間としての人々を見て居るのに過ぎません。物が一面破れて行く處に、靈光、實在が、かゞやき初めます。決して超越主義ではありません。全身的の觀察、全人としての幸福を追求する唯一の道なのであります。私は決して無欲ではありません。或は諸君より欲が深い方かも知れません。併し全身觀の上から大欲を望んで居るのでありまして、決して社會惡を惹起する慾心ではないのであります。

ですから、「佛子」は必らず一度、「空」「無我」の水槽を漏過して居ります。私どもが、一階では都合が惡い時に二階に昇ります。それには、梯子段を上らねばなりません。梯子段は、上るか下るかするものでありましてそこに停止して居てはなりません。誰でも梯子段で一服といふ人はありますまい。「物質は空なり」「我は本來無我なり」といふのは、佛子のさとりの上階へ上る梯子段であります。此の梯子段を上らす爲に、失戀があり、破産があり、死があるのであります。「不幸」と「死」は、「物は空なり」「我は無我なり」の心構へを與へてくれる唯一の教材でもあります。併し、梯子段は梯子段でありますから、「佛子」の上階へ上らねばなりませ

ん。「久遠の本佛」は、我等に、此の上階とも見るべき常樂の世界を開展せしめんとして其の機會をお與へて下さつたのであります。段を上らない者は、當然下らねばなりません。失望、落膽、荒怠、過激の地下へでも降りて行くのであります。ですから久遠の本佛は、上れないやうな人には、そんな機會も與へられない。機會が與へられることは、上り得る能力のあることを御覽になつて居るのであります。吾々は少し重い荷物でも持たねばなりません。持てる力があるのに、私には重いから、持てないといふのでは、それは「久遠の生命」と交渉を持たない人であります。「佛子」のさとりはおろか、「物質は空なり」の梯子段の下へも寄り付けない人なのであります。火宅の中にあつて、玩具を持つて遊んで居る子供のやうに、これは、譬喩品にある比喩の話でありますが、苦を以つて苦を拂はんとする者です。苦を逃れんとして、苦の深みへと足入れをして行く。親の意見で、女と手切れの話に行つて、却つて色女に引張られて行く。かうなつたら、野となれ山となれだと度胸を据えてしまふやうな考へになつたら妄者です迷者です。佛は此等に方便を與へて、救ひの道を御案出になりました。然らば、時にとつて不幸も、病氣も、「佛子」のさとりに轉向せしめる方便であります。方便とは眞實の道へ向ける

聖なる策を與へることでありまして、虚僞ではありません。禍變じて福となり、毒藥變じて良藥となるとは、このことであります。

物の力を試めせ

現代人間の生活は經濟が中心であつて、物の偉力へのみ心の方角が向き過ぎて居ります。精神總動員といつても、物の爲の心を動かせることを考へて居るやうであります。腹が減つたのは、物を喰はねば、心では滿腹しません。物へ物へとの魅力が增大するのみであります。所が病氣とか幸福とかといふ問題になりますと、物が動かす心の力ではだめです。物は物を作り、又物を破壞する力はありますが、心を創作する力は持ちません。眼の心、耳の心、舌の心、鼻の心、即ち視覺、味覺、嗅覺、觸覺といふのは、物の作用が心となつたまでゞす。美し色、良い音、美味しい味といつた所で物が作用した心の滿足です。吾々の平日精神とか心とか名づて居るのは、大ていこれをいふのであります。此の心を我れと思ひ、可愛と執し、憎いと排擊し

て居るのであります。しかしこの物と、この心とは、實は假りの相ではあります。貴君が見て居る物の色は、外界に實際ある色ではなく、エーテルが吾等の眼球を通るときに曲折の度合によりて、赤となり青となり黄となるのでありまして、今見て居る庭の木に本來の色があるのではありません。又音も空氣の波動であります。耳の皷幕を打つときに音となり聲となるのであつて、鐘にも太皷にも音はない、あるのは空氣のひゞきだけです。蓄音器やラヂオを見て、誰しも了解がゆくことであります。して見ると外界にあるものは實は吾等には分らないので、吾々が物と認識して居るものは、吾々が、五官の飜譯によつて始めて知つて居るのであります。五官で見た物であり、五官によつて働らく我れなのであります。然らば或る實體を五官で見た影をとらへて、物なり心なりとして居るのであります。假相を見て眞實の世界なり久遠の實相なりを觀ようとしても、固より不可能なことであります。ですから、得ては喜び、失ふては泣く自分であります。「一切は空なり」と外界の物も、又物と思ふて居る認識もこれ本來空なりであります。こゝに一切の執心はとけるのであります。物と小我とがとけたときに、何が出るでせうか。何かゞ出ます。空とは何もないからつぽといふのではありません。「空」の構へを持

つからこゝに出るべきものが出るのであります。眞の我は自分の身體が出來ない前の自分です父母が生んでくれる前の自分の實體です。即ち久遠のいのちであります。ですから、久遠のいのちは、物質が、無くなつてから、現はれるのではなく、物質と見て居る人間眼力の、もう一つ奥に、同時同處に存在して居るのであります。糞便もするこの私のまゝ「久遠のいのち」なのです。「久遠のいのち」が、五官の働きをもつて、人間として生きて居るのであります。妙なる我であります。「蓮華の私」であります。經文には八才の龍女が成佛をしたお話が述べてありますが、智惠第一の舍利弗すら、龍女が成佛するなんて到底出來ない問題であらう。宗教生活に入つて日も淺く、法を聞いて悟道の域に達するのも、遙かに遠い。女人には種々信仰の道に支障がある、さう早急に成佛はむつかしからうといつて、女人成佛の困難なことを確信して居つたが、その龍女が釋迦牟尼佛の御前に於いて忽然として、佛と成つたといふ説話が擧げられてありますが、吾々も、「佛子」だといふ、さとりは、修養をして段々向上して、佛の智惠を悟つて、「神人」「佛人」となるのだと思つて居るやうなことでは、結局いくら「行生活」を積んでもだめでせう。「久遠のいのち」は、私が創造したものでも、私が考へ出したものでも

ありません、私の實體として、久遠から存在して居るのであります。成るといふても、私の信眼に發見したらよいのであります。これから磨くのでは、ありません、既に磨かれ、修行せられてあるいのちであります。忽然の發見であります。信眼で發見すれば、神通之力は發揮されます。「佛子」のさとりから、人生を觀ると、世の中の一切が、佛から造り出されて來たと得心が行くのであります。これを「佛界緣起」といひます。凡てが光明から生れ、佛智見から生ずるのであります。その前には、不完全も、苦惱もないのであります。「佛子」のさとりを持たない人の前に展開する人生は、一切が無明から緣起されてくるのであります。無明から人生の一切が發展されてくるのでありまして、それらは、皆、苦の種となり、惱みの原となるのであります。無明の世界を去つて、佛界から、開展してくる世界に安住するこそ、こゝに常樂の世界があるのであります。病氣は我れの無明が生み出す。假象です。不幸だと歎くのは、無明が緣起せしめる事象だからあります。久遠のいのちは、無創造の世界ではないのであります。常住に「菩薩の行」を修して、自らの絶對性を充實せしめて居ります。「佛子」のさとりをもつた我等も、佛自からの發展する佛事佛業に參加したものであります。

神通力の生活化

久遠のいのちに生き得た人は、生きて輝く佛心を開顯した人であります。大菩堤心を起し得た人であります。此の人の心地は明朗であり、香氣馥郁、妙聲自然に聞ゆるの境界であります經文にも「歡喜身に充徧す」とあります。「布施し供養せん」ともありまして、此の歡びを、この功德を、施さずには居られないのであります。財の施は、與へることによつて、自分の所有が減るのでありますが、久遠壽命の功德は、これを人に施すことによつて、却つて自分の嬉びと、滿足とが充たされるのであります。汲めば汲む程、功德力は泉の如くに湧き、與へれば與へる程、自他の喜びを增進するのであります。一切の施しの中に於いては、尊無過上の大施であります。人の世の大施主としての嬉びを其身に感ずるのであります。「佛道に回向せん」とありまして、其の人の一切の經驗は皆それが佛道の爲に向けられるのであります。漫才士は何を見ても、それが漫才の材料となつて、笑はす爲に向けられるやうに、人間生活の一切の出

來ることが、みな佛道、精進に回向されるのであります。

「安住して心亂れず」とありまして、不動、大禪定の心に安住して、動搖しないのであります心の動き易いのは、内に迷ふ所があるからです。無明に出發して居るからです。久遠のいのちと共に生きる身がどうして、動搖をいたしませうか、「恐るゝ所更になし」であります。此の故に能く「勤めて精進」することができるのでありまして、「又能く忍ばん」で一切を忍受して、遂に其の目的を達成するに至るのであります。「精進勇猛」「志念堅固」は「佛子」の德行であります。

「口の氣臭からず」「舌常に病無く」「口に亦病無けん」「唇、舌、牙、齒悉く皆嚴好ならん」『眉高くして長く、額廣く平正にして人相具足せん』。

心に「佛子」の自覺を持つ者は、良く身體相好の上にも、功德が表はれて、心身强健であり端嚴なのであります。「是の功德を以つて、六根「眼耳鼻舌身意」を莊嚴し、皆清淨ならしめん」とも說かれてありまして、人間的、無明の窓であつた五官、六根が、久遠のいのちの信仰に入つた人は、莊嚴化され、清淨化されると說かれてあります。此の人の眼に見るところは、

正しく、美しく、嬉ばしき點を能く看取して、自分も他人も、伸張の法悅に浴するのであります。手近い家庭に於ける教育でも、子供の缺點を指摘して叱り付けてばかり居る教育は、決して子供を善良に導く道ではありません。「子供」も「神の子」『佛の子』として無限の可能性を持つ者として信愛し教育して行く所に、子供の無限の生長があるのであります。學業成績でも賞める方がより以上に優秀になります。もし不出來な點を高調して能力なしと斷定しようものなら成績はます〳〵低下する一方です。で一切の善惡は共に、佛道へ回向することが有難いのであります。

耳も、此人の功德力で清淨化され、人の嬉ぶべきこと、人の樂しむことを聞いて、腹を立てること、怒ることは、聞いても耳に入らない。といつて人から乘ぜられるとか、人から誤魔化されるといふ愚でもありませんが、一切のきく事が清淨化され、喜ぶこと助合ふこと、共力することが、耳に這入つてくるのであります。惡口だけが耳に聞えるといふのとは、全く耳の働き方が違つてくるのであります。松吹く風にも、法身の說法をきゝ、田に鳴く蛙の聲にも、天人の音樂を聞く人であります。天空の妙聲は、此の人を常樂の生活に入らしめます。山林、溪

谷何の淋しきことがありませう。都市の雜音何の此の人の耳を煩はしませう。一切の音聲は此の人の耳を穢すことは出來ません。また鼻の働きも然りでありまして、よく變な香だと、惡嗅を苦にする人があるが、あれはまだ鼻の清淨化、自在化を得て居ない人です。

大變熱心な信仰家で山下さんといふ方は、何處へ行つても、馥郁とした香が自然と、きけてくるといつて、感激をして見えました。又、森山さんといふ方は燈明の光りの周圍に、虹の如き光が添ふのが見へるといつて、感謝して見えました。これを單に幻覺として、除けるべきではないのであります。其の人の五官が清淨化されるから見えるのであらうと信じます。

舌根が清淨化されると、一切の味が、上々味と變つてくるのでありまして、何を頂いても皆美味しい、美味しいから、皆營養になる。敢て高價な營養品を喰らなくても、此の人の舌の上に乘ると、上味と變るのでありますから、こんな結構なことはありません。どんな御馳走を出しても、不味さうな顏をして食べる者があります。これは皆我儘者です。怒る人、心配な人、憂鬱な人はどんな御馳走でも身に付かず、營養をとりながら、やせて行くのであります。意の清淨な人、「妙意根」に達した人は、其の人が世間の本を讀んでも、其の義趣に於いて「實相

と相違背せず」「俗世の語言」も「資生產業」も、「皆正法に順ぜん」といはれてあります。歷史を讀んでも、醫學を見ても、算盤を持つても、ハンマーを振つても、皆これが正法に順應して眞俗一體の生活となり、「天晴れて地明かなる」心地にあつて常樂の生活が建設されるのであります。

觀心する久遠の生命

現代人の宗教意識として、流行神といふことは、問題でなくなりました。電車の營業政策から、成田の不動、豊河の稻荷への參詣宣傳は行はれて居りますが、少くとも宗教を眞面目に求めて居る者にとつては、はやり神の信仰は問題でありません。

神は絕對、佛といはれ、神と指されるものは、根本は唯一つ、絕對のものに二つはない。故に、何宗で信ずる佛も、何處の派で信ずる神も、根本の實體は、たゞ一つであると信ずるのが一般の常識とさへなつて來ました。從つて何々の宗派に囚はれて信仰するといふことが、甚だ

狹いやうな氣がするといふ傾向が見うけられます。これは確かに、宗教意識が進歩したものだとも見られませう。

しかしその絶對無上の御本尊が、如何なる靈體であるかといふことになると、一向わからない人が多いのであります。キリストの神も、古神道の神も、禪宗の佛も、眞宗の佛陀も、法華の本尊も、御本體は皆御一つであるといふことは、一般に申すことであります。即ち宗派は後から出來たもの、本尊の實體は久遠から實在するもの、故に宗派の專有すべきものではないといへるのであります。

でも、御一體の本尊を、例へば滿月のやうな、完全な神を、或は三ケ月の如く、或は五日月の如く觀て居る宗派もあるわけであります。滿月を滿月と觀て居れば、問題はないのでありますが、滿月を、五日月と觀て、君は月を是の如くと觀て居るが、私は月を三ケ月と實感したといふ所に、信念の違ひが出來てくるのであります。信念の違ひは、安心の違ひです、生活の違ひであるのであります。ですから、信念の據所となる、バイブル、經典が問題となつてくるのであります。生長の家では、何宗の神でも、佛でもよろしい、其の神なり佛が生長の家へ來ると、一層よく生かされてくるのであると、甚だ手前勝手の御意見を述べて居りますが、元來法華經は、三千年以前に、唯一、絶對の御本尊を、最も活かして說き示された經典であります。又日蓮上人は七百年以前に、その御本尊を、久遠の生けるいのちとして實證體驗されたのでありました。

一體「佛陀」とは「覺者」と譯せられるのでありまして、「覺つた者」といふことになるのであります。何を悟つたが、宇宙の眞理である「諸法實相」の道を悟つた者といふことになるのであります。佛陀にはいろ〳〵と修行は違つて居ても、誓願は異つて居ても、實相の道を悟つて、それを一體になつた方でありますから、大日如來、藥師如來、善德佛と名稱は異つても悟られた道の內容は一つで、諸佛は御一體であります。法華經寶塔品には、これを儀相によつて說き示されてありまして、釋迦年尼佛が、印度靈山で法華經を說かれて居ると、多寶といふ佛さまが、五百由旬の大寶塔に乘つて東方の寶淨國から、此の娑婆世界へ來現なされたのであります。その大寶塔は、まことに眼も醒める程立派なものでありました。中には莊嚴華麗な龕室があり、金銀瑠璃の瓔珞が垂れ、寶鈴が幾萬と懸けられ、旛蓋や憧旛で裝飾をされてある實

に結構無比の大寶塔でありました。金、銀、瑠璃、硨磲、碼碯、眞珠、玫瑰の七寶をもつて莊嚴されてありましたから、これを七寶の塔と讃歎して供養し奉つたのであります。又栴檀の香が四方に散ぜられたといふのでありますから、一切の人々は、恭敬し奉らざるを得なかつたのであります。來集の人々は、渴仰のあまり、釋迦牟尼佛にこの寶塔のことを種々おたづねをしたのであります。何の因緣でこの寶塔が現れたのですか。又寶塔の中から、「皆是れ眞實なり」と、釋迦牟尼世尊の御說法を、、證明せられた御言葉がありましたが、その寶塔の中には、如何なる佛樣が、居らせられるのでありませうか。

「皆是れ眞實なり」と證明になつたのは、道はたゞ一つ過去の佛が說かれるのも、今、佛陀がこゝに法華經を說くのも、諸佛の悟り給へる道は、同道であることを證明なされたのである。それから、此の寶塔の中には、多寶如來といふ佛樣が、安座ましますのである。と答へになりました。來集の者はその佛樣が拜みたくて、たまらない。どうか寶塔の扉を開いて、中なる佛陀を拜まして頂きたいと願つたのでありました。釋迦牟尼世尊は、來集者に答へられて、多寶如來には深重な願ひがあつて、其の全身を御示しになる場合には、必らず、十方世界にましま

す、分身の諸佛を盡くこゝへ招じ還して一緒に集め、然る上で多寶如來の全身をお示しになることになつて居る、故に十方世界の分身の諸佛を、召還することにしよう。と、幾千萬といふ多數の分身佛を御召しになるのであります。それにしては靈山は、山上であるから狹い、どうしても大空をその舞臺としなくてはならぬと、立體的な大舞臺の上に、顯現せられるのであります。もう山も丘も、小石もなくて、清淨、華麗なる國土が現出したのであります。やがて分身の諸佛は、皆悉く來集されました。叮嚀なる御挨拶も終りました。釋尊はそれではといふので寶塔の大扉を開かれますと、中には、多寶如來が安座せられ居まして、半座を釋迦牟尼佛の爲にお讓りになつて「此の座に就きたまふべし」といふので、釋迦佛と多寶佛が並んで座せられたのであります。これを釋迦多寶二佛並座といふのであります。この敎說によつて拜しますと、印度靈山といふ一地理的の御話でもなく、又釋迦牟尼佛といふ、歷史上に表はれた佛陀の說敎といふ小さい意味ではないのであります。證つた佛も、證明した多寶佛も、來集した分身佛も、唯一つの道の上に顯現せられた諸尊であります。たゞ一つの道を悟つた佛が釋尊であり、此の道を證明されたのが多寶佛であり、他の國土に於いて、此の道を敎說せられて居る

のが、分身の諸佛であつたのであります。佛に古今はあつても、道に古今はないのであります衆生を救ふ上に、國の東西はあつても、道の東西はありませぬ。三世に通じ、十方に通じて普遍絶對の道であります。だが「道」といひ、「眞如」といひ、「實相」といひ、「法性」といつても「宇宙生命」といつても、私どもか宗教的に仰ぐ、「神」、「佛」といふ信念がぴつたりきません。こゝに於いて壽重品の教説が、なくてはならぬのであります。

道とは神なり、「實相とは本佛なり」と、御本尊を明確に立てられて來たのか、法華經本門壽量品の極説であります。

道といつても、抽象的なひゞきが聞える。實相といつても、普遍の「眞理」といふ、香が高い。表現といふものは甚だ大切であります。言葉は假りのものだから何んでもよいといつてはならぬ。それは宗教上の個人主義だ。今は一切の人々に與へるのだから、滿月が滿月として、表現されねばならぬ、道といひ、實相といふ偏した名でなく、眞理と、智惠と、慈悲のかたまりである。佛そのものだと表現しなくてはならぬ。佛といつても、眼前の釋迦ぢやない、久遠の生命としてのわしぢやぞ、と顯説せられたのであります。

印度の釋迦が、即久遠の本佛であるとは、來集の者にも、直に信ぜられんから、「久遠の弟子」こゝに在りと、示説せられたのが、湧出品であります。釋尊が御自分の久遠本地をお顯しになる前に、「久遠の弟子」を召來して、數限りなき、眞に無數の大菩薩が、來現したのであります。菩薩として現はれになりましたけれども、諸佛よりは遙かに立派な御方々のお揃ひでありましたから、耳も驚き、眼も飛出して、心も顚倒してしまつたのでありました。こゝに於いて、釋尊を、從來の考へで、吾師なりと見て居たら、とんだ間違ひが生ずるぞと氣がついて、「三請三止」のおさとしがあつて漸く「如來秘密神道之力」の御經が、説き示されたのでありました。

我は、久遠實成の本佛なり、實相とは我が悟れる道の名なり。我れは其の道を悟る大智を有てり。のみならず一切衆生を救はんとする大慈悲心をも持てり、我れの壽命は永遠なり、久遠生き通しのいのちなり。常に、永遠の修行を積み、常に久遠の悟りを成じ、常に此の娑婆世界に住する大生命なり、心なり、魂なり、歴史の我れに囚はるゝな、久遠のわれを仰げ、人壽八十歳の我れに膠着するな、久遠の壽命を知れ、滅する我れと思ふな、不滅の我れを發見せよ、

我は絶對なり、無上尊なり。說き顯す釋迦佛は、丈六の小身なれども、說き顯されたる實成久遠の佛は、絶對無比の無上尊なり。久遠の我は、現前の釋迦肉身に住むのみならず、汝等の心にも住み、草木、瓦石の中にも潛む。久遠の我は、自由なり、自在なり。如何なる、魔障にも犯されず、いかなる迫害にも恐れなし。我は絶對なり、故に敵はなし。我は萬物を生む根元なり、故に我は主なり。我は自在なり、故に隨所に現はる。我れは、眞理の身なり、我れは大智慧の身なり、我は大慈悲の身なり、これを三身の德といふ。三身は別の佛にあらず、唯一の久遠本佛の三德なり、我は眞理なる故に、よく萬物人類をして生命あらしめ、我は大智身なる故によく一切衆生に、悟りの智慧を與へ、我れは、大慈心なる故に、よく一切衆生の苦を救ふなり、實在身も我れなり、應現身も我れなり。我れは、總ての總てなり、一切の一切なり。

「或は己身を示し」とは久遠の佛が、佛として地上に現れることなり。「或は他身を示し」とは或は菩薩となり、或は偉人となり　或は母となりて、現るゝをいふなり。我が壽命は、久遠なれば、悟りも、亦久遠なり、我が修行は久遠なる故に、我が世界を向上せしむることも不息不休なり、絶對なるが故に、進まざるにあらず、絶對なる故に能く功を積むなり、我は、常に娑

婆世界に、住する故に、汝等と共なり。汝は汝の汝にあらず、我れの汝なり。草木は、草木の草木にあらずして、我れの草木なり、天地も我れの天地にして、水も我れの水なり。一切は我れと共にあり、我れの現れなり。汝は汝が生けるにあらず、我れと共なる故に生けるなり。五穀は、汝の五穀なる故に身を養ふにあらず、我れの五穀なる故に汝の身を養ふなり。久遠の我は、印度の釋迦一人の所有ならず、即汝の所有なることを知れ、たゞ釋尊の說法ありて、久遠の我れを、表現したるにより、しばらく、久遠實成釋迦牟尼佛と名づけたるなり。久遠の我は無名なり、教主に釋迦の名あり、故にこの名を立てたるなり、實の名は、妙法蓮華經といふべきなりと、說き示されたのであります。

日蓮聖人は、この御本尊を觀心本尊として信心の上に御顯しになりました。法華經の說示はありましたが、誰も此の本尊を心に生かす人がなかつたのであります。即信心の仕方が分らなかつたのでありました、そこで佛陀入滅後二千二百二十有余年間は、未だ曾つてこれ有らざりし、大曼荼羅御本尊をこゝに現はすとて、次のやうに教示されました。

爰に日蓮いかなる不思議にてや候らん、龍樹天臺妙樂等にも、顯し給はざる大曼荼羅を、末

法二百餘年の頃はじめて……顯し奉るなり。首題の五字は中央にかゝり、……釋迦多寶本化の四菩薩肩を並べ。普賢文殊等舍利弗目蓮等坐を屈し、……惡逆の達多、愚痴の龍女一座をはり。……鬼神母神十羅刹女等此御本尊の中に住し給ひ、妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる是を本尊とは申なり……此御本尊全く餘所に求る事なかれ、只我等衆生の、法華經を持つて南無妙法蓮華經と唱る胸中の肉團におはしますなり。是を九識心王眞如の都とは申なり。……此の御本尊も只信心の二字にをさまれり、以信得入とは是なり。（日女御前御返事）

此の御教示は全く吾等の信眼を開いて拜しなくてはならぬのであります。文献的價値など淺解してはなりません。即ち教相説示の本尊でなく、生きた御本尊が觀心の上に具現せられたと拜すべきであります。故に此の御本尊を外に求めてはいけない、吾等の胸中肉團のうちに安住し給ふのであります。即ち九識といつて心靈最高最奥の心の都に鎭座し給ふと御示しになつたのであります。今、御文によつて其の尊容を拜して見ませう。

「首題の五字は中央にかゝり」御本尊の中心であり主體であります。

妙法蓮華經の五字は無論名でありますが、心なり、體なり所詮なりとも示されてあります。五字は御本尊の御靈體に即した名なのであります。久遠のいのちには名はないのでありますがその久遠のいのちは、かういふ佛であるぞ、即ち妙法蓮華經であるぞと説かれたのですから、體と一致した名をとるのであります。本體は一つだ、名は何んといつてもよいといふのは、道に對する禮儀を失して居るわけであります。求道者でなくて、道を賣物にして居るのであります。妙法蓮華經の本佛といつたのでは、本が賣れないから、何々神と書かうといふのでは、商賣上手の方法にか過ぎません。名は何んでもよいといふのでは、教へにはなりません。御本尊は、教示によつて現はれるもの、體驗によつて觀心するものであります外國人のいつたことなら何んでも嬉んで引つぱつてくるが、日本の宗派でいつたことは、頭から受付けられぬといふのでは、心轉倒の衆生です。

次に本尊の實體は、久遠の本佛であります、久遠實成の佛、即ち眞理身と大智身と、大慈身との總和せる魂であります。

又本尊は、正に吾々の道であります。佛の悟られた久遠の生命は、道であり、それに到達せ

しめんが爲の實踐の修行道なのであります。因行、果德の具はる道なのであります。

さうして又此の御本尊の功用は、吾々に菩提心を起さしめ、無二の信仰に入らしめ給ふのであります。又此の御本尊は、教へとして示顯せられるのでありますから、「教」こそ本尊能顯の寶典として尊重しなくてはなりません。これを五玄具足と申して居ります、五つの幽玄微妙の意義が具足されて居るのが首題中央の五字であるといふことであります。

「釋迦多寶本化の四菩薩肩を並べ」

釋迦は大智身、多寶は眞理身、本化の四菩薩は大慈身、即ち「法身」「報身」「應身」の三身が一身に具足して居るのが、「久遠本佛」であり「妙法蓮華經」であります。普賢文珠、舍利弗目蓮、提婆龍女、鬼子母神十羅刹女、が此の御本尊の中に住し給ふて、「妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる」とあります。惡逆の提婆も、愚痴の龍女も、本有の尊形となると示されてあるのですから、即身成佛をしてしまつたのであります。妙法五字の久遠本佛に照顯されたところです。提婆の提婆でなく、久遠本佛の提婆となり、久遠生命の龍女となり、久遠のいのちに生かされた鬼子母神となつたのであります。それですから、吾々も此の御本尊を、心

の外に求めてはならんぞ、吾々の心の奥の都に安住し給ふのであるぞ、觀心の上に此の御本尊を拜せ、信心の二字に、安住し給ふのみと、心血を注いで説示されたのであります。此のことは、「日蓮當身の大事なり」として、口に説き、心に説き、身を以つて説き、四ケ度の大法難も遭はれたのでありました。

「日蓮が頭べには、大覺世尊(久遠本佛)宿らせ給ふとは、此の實證であり、體驗であります。で汝は久遠本佛の汝なりといはれたのであります。しからば、森田の久遠本佛であり、田中の久遠本佛であります。私は本佛に在つて生きて居り、本佛と共に歩き、座し、食し、活動をして居るのであります。私のお寺には、杉がこんもりと七八本並んで居る丘があります。夕方の暮れかゝつたときに、杉林を見ても、杉の木らしいことが分らずに、一面薄墨で塗りつぶしたやうであります。ところがお天氣のよい日にそこを見ますと、枝と枝とのすき間から青空が見えまして、青空の素地に、杉の木がくつきりと浮び出ます。私はこれだなあと感じました。光があつて、杉の影がわかるのだ。吾々は本佛五字の光明に照らされてあるから、自分が存在して居ることすら、解るのだ。無明から出發した人間が、何の自分の存在が分り得やうぞ、迷ふ

者は要するに迷の存在であります。自己の存在の嬉びが何處にあるのでありませう。杉木の影は、本佛の光に、紋綾をつけたところです。吾々は、本化の流類として、「佛子」として、本佛の世界に、獨自の綾をつけるのであります。人生は影ではないのです、本佛の國土に莊嚴の綾をつけるのであります。久遠のいのちは、固定して居る絶對ではありません、伸びる絶對であります。私と共なる本尊を觀よ、私と一緒に住居する、久遠のいのちを蔭すな。本因と本果か「神」と「神子」であり、「佛」と「佛子」であります。天人合一、佛凡一體、神人一如の生活こそ、本尊を觀心し切つた人の光榮であります。

此の人にして何の不安がありませう、何の心配事が起りませう、到る所幸福と感謝の道場です。何の病氣などが起りませうぞ。病氣は、迷ふ心の現はれです。「此の經は人の病の良藥」です、絶對安心の境地には不安と、病は全の消散滅却するものであります。

三、國家篇

國と人

久遠のいのちに生きた私が、照顧脚下すれば、家庭があり、社會があり、國家があるのであります。人は社會を爲さずしては、生きられず、家庭なくしては、生存の目的は達せられません。生きるとは、常樂に生きることであります。現代人は、國家の力なくして、一日たりとも安穩に、平和に、幸福に生活することが出來ないといふことを眞劍に自覺させられて居るのであります。西洋では、人が國家を創つたのであります。各個人々々が其の生存を全ふする爲に國家を形成つたのであります。ですから其國の歷史も、その目的の爲に開展せられて居ります然るに現代の人々は、國家の爲に人が創造されて居るのであります。國家の目的を達成する爲に、人は教育され、資材は開發され、産業は振興されて居るのであります。人の爲の國ではな

く、國の爲の人なのであります。國に對してかう悟るのが國家の本然性に合致するのでありまして、法華經と、日蓮上人は、國家に對して既にかく開顯的意義を發揮されて居るのであります。

ですから、國家には、國家自體に一大理想があり目的があるわけであります。我が日本國は神が肇められた國家でありまして、「神の心」を實現するのがその目的であります。民族の發展と、國民歴史の開展とは、「神の心」を實現せんが爲に、地上に蒔かれた人の歴史であると觀られねばなりません。ですから、日本の歴史は、人慾の開展した歴史と觀ずして、「神の心」を地上に布かんが爲に開展せられた歴史であると觀られるのであります。さういふ信念から、久遠の日本の姿を直視したいと思ひます。

神の肇國

天照太神は、宇宙絶對の意志として、高天原に御出現ましまし、神意の法則を、地上國家の

法則に實現すべく、一系皇統の神國日本を、肇められたのであります。

「吾が子孫の王たるべき土なり」と、皇統を御定めになつたのであります。實に日本の皇統は民意でもなく、權力でもなく、天照大神の神意によつて、決定されたのであります。ですから「神の肇めた國」であり、「王の國」であります。大日本帝國は萬世一系の天皇これを統治す」とある憲法の條文と、同意と拜すべきであります。「王たる可き土なり」と仰せられて、「王道を行ふべき國家を肇めるぞ」との御意志であつたと拜せられるのであります。王道を行はせ給ふ國王と、王道を行ふ國土とが、天祖の御神意によつて出現したのであります。王道とは、「天業を恢弘し、天下を光宅す」との御意であります。

皇孫に、三種の神器を御與へになつて、鏡の如き「神智」、璧の如き「神德」、劍の如き、「神勇」をもつて、地上國土に、王道を布くべしと示されたのであります。此の天業を恢弘してこそ、天下は平和に、光り輝き、世界は常樂の國家が現出するのであります。ですから日本の存在は、日本の爲に必要な國家でなく、世界の爲に必要な國家であるのであります。世界の爲に存立する日本であり、又日本の爲にも、「神國日本」を伸張しなくてはならぬのでありま

す。

「寶祚の隆えまさむこと當に天壤と窮りなかるべし。」

皇位の隆昌、皇運無窮は、神意の無限發展の顯現であります。國家發展は、克忠、克孝の具現であります。

永遠の日本、久遠の日本は、かくして世界の爲に存立されたのであります。臣民吾等は、又皇道翼贊の赤誠を捧げて、天壤無窮の皇運を扶翼し奉らねばなりません。

八紘一宇

神武天皇は、神國日本を地上に御建設になり、こゝに神の國は、天皇の國家なり、一系の天子、代々德を深く厚く樹て給ふて、慶びを積み、輝きを重ね、國體の精華を發揮して、「正を養ふ心」を遍く天下に恢弘せられたのであります。

「上は乾靈國を授け給ふ德に答へ、下は皇孫正しきを養ふの心を弘む」

と仰せられ、また、

「慶びを積み、輝を重ね」

とも仰せられてあります。「正」と、「慶」と、「輝」とは神器の三つを授け給ふた御神意と拜して居ります。則ち、鏡は「正」、璽は「慶」、劔は「輝」でありまして、この養正、積慶、重輝の三大綱を以つて地上日本の建國大業が行はれたのであると、私どもは拜して居るのであります。神意を弘める國、正を養ふ心を弘める國家は、地上の光りであり、國家の「主」「師」「親」であります。かゝる國家の力用にして、

「天下を光宅する」ことが出來るのであります。世界を絶對平和、王道樂土と化するのは、我が日本の一大理想なのであります。今や實現の一歩より一歩へと、時運は開けて來ました。新東亞の建設は、即ちそれであります。「八紘を一宇」とすることは、日本の先天の使命であり天業なのであります。

八紘とは、世界を指すのであります。一宇とは、一家の如くに、平和常樂の地上とすることであります。かく神意が國家となつて働くのが、神州日本なのであります。富士があり、櫻が

あり景勝の地が、神州の日本でなく、「神の心」が、國の仕事となつたのが、我が大日本國なのであります。

「通一佛(神)土」は日本國が、「八紘一宇」の大使命を達成したときに、讀み終るところの御經文であります。永遠日本の前には、前途遼遠の歎をいだいてはなりません。久遠の日本は、すでに肇國、建國されて居るのであります。慶びを積み、輝きを重ねることは、歡喜をかさね光を增す活動であります。

世界を一地域の日本にしようと欲するのではありませんから、世界は須らく安心するがよろしいのであります。一宇の精神をもつて、世界を一家の如く絶對平和に爲さんとする神の運動なのであります。

東西相倚り

東西の各國は「益々國交を修めて、友義を惇し」と仰せられました。互に「相倚り、相濟し

て、福利を共に」して行けとも宣らせられたのであります。かくして「日進」の大勢に伴ひ、「文明の惠澤を共に」することが出來るのであります。聖戰四年の苦闘は、東西相倚り、福利と惠澤を共にせんが爲でありました。人類共存の目的達成し、共榮の嬉びを齎さんが爲であります。米國には、米國の文明あり、精神あり、支那には、支那の文化あり精神あり、獨逸には、獨逸の魂があるのでありまして、日本精神は、此等と、相融和し、開顯し、光被して、光を照し輝かして、福利惠澤を平等にせんとするのであります。王師に敵なし、日本は何づれの國へも歡迎されねばなりません。

天業翼賛の臣道

日本の文化は、肇國精神を根幹とした文化であります。日本の教育は、國體精華昂揚の教育であります。日本の政治は天皇の政治であります。日本の農士もこれ天皇の地、日本の國民の經濟もまた、皇道に基く經濟であらねばなりません。

「治生産業は、皆正法に順ず」

でありまして、日本の産業、日本の政治、皆「正」に順ふのそれであるのであります。

日本文化が肇國精神を忘れて居たり、日本の教育が、天業翼賛の國民を造り得なかつたり、日本の政治が、天皇に仕へまつるの政治でなかつたりしては、地上には、日本人は居ないことになるのであります。日本國に住んで居る人間はあつても、日本臣道を實踐する人間はなくなつたのであります。

日本の農土は、天皇の農土であり、日本の經濟、産業は、天業翼賛の爲の産業であり、工藝であり、經濟でなくてはなりません。今事變について、産業經濟の國家統制が行はれ、官民共に、種々なる苦闘劇を演じられて居るのでありますが、一切の精神文化、物質文明が、天業恢弘の一大理想に統制せられて居ることは、日本國本有の特性でありまして、「私利私慾」「利己私福」の爲のみの、産業でも經濟でもないのであります。日本の經濟人、産業人は、眼醒めた上にも、醒めねばなりません。天業翼賛の臣道は、たゞ武士道だけに、教育者だけに、官吏道だけにあると思つて居てはなりません。農民道、商人道、工業道に各々臣道を確立して、天

業翼賛の日本人を造らねばなりません。一體日本人の人口は年々百萬餘の増加を見て居るのでありますが日本臣道を自覺した人民は年に幾人づゝ増加し誕生しつゝあるのでありませうか。

神意日本の實現が、如何なると思ひますか、諸君、日本臣道たる天業翼賛の信念を振作するこそ、剛健の精神であり、振作更張の道であります。國民精神涵養とは、この天業翼賛の臣道を、開覺自省せしめることでなくてはなりません。斯の道に自覺したるもの、どうして浮華放縱、輕佻詭激たり得ませうぞ自から時弊は改められなくてはなりません。忠實業に服する努力もこゝから生れ勤儉産を爲しの力も、斯道自覺の信念から、生じてくるのであります。この一錢は、我れの一錢であると共に、國家の一錢であり、社會の一錢であり、天業翼賛の一錢なのであります。今時、神社に大金を寄附し、社會事業に資念を寄附されることは嬉ふべきことでありますが、併し、天業恢弘の爲にこの一錢を捧げる人果して幾人ありませうぞ。質實も、責任も、節制も、此の一錢を、天業翼賛の爲に捧げやうと思ふ信念から生ずるのであります。文筆を以つて翼賛するのも、技術をもつて翼賛するのも、皆不惜身命の信念からです。こゝに至つて、皇運を扶翼すべしの聖旨に副ひ奉ることができるのであります。

四、實證篇

「信行坐」の實習法

宗教的な「行法」としては、「唱題行」「讀經行」が正しいのであります。これは今此にお話しをする紙數がありませんからおわかりのことゝして省略して置きます。

私は、特に「信念確立」「治病强健」「招福除厄」を希ふ人に「信行座」のお勸めをして居ります。

「信行座」の功德利生は、甚大なものでありまして、この座によつて、誤れる信仰、不安定な信仰が、一變して、正しい而かも强い信念を獲得した方々もありますし、又、難病の全癒した人もあり、家庭圓滿の靈光を浴した人々も澤山にあります。

一々何誰は、斯くして家庭圓滿になり家運も增進して來た。又何誰は、青年信仰家として生

活戰線に大奮鬪して、今日是の如き成功を見た。又何の誰はかく〳〵の難病であつたが、「信行座」の實修によつて、かくの通り病氣が治つた、といふ實例を擧げて、此の「信行座」なるものゝ偉功を、實證することは大變有益なのでありますが、何分本書刊行の目的から紙數に限りがありますので、甚だ遺憾ではありますが、之を省略することにいたしました。此に實修法を簡略にかきます。實際は、直接私の指導をうけてやつて頂きたいと存じます。遠隔の地で來られない人の爲には、後日詳しい實修法を書いて送りたい豫定であります。

「信行座」

一、座し方

正しくゆるやかに座るのであります。大體靜座の座法でよろしいのでありまして、左の足を右足の上に重ね、痩せた人は、足の重ねを深くし、肥えて居る人は、淺く、或は拇趾だけを重ねて座ります。腹は、ウンと力を入れて伸ばし、腰もチヤンと伸します。脊柱を眞直にして、胸はゆるやかに、すべてを伸び伸びと、何處にも擬りを作らぬやうにしてお坐りなさい。馴れないうちは、身體が固くなつて疲れますが、少し馴れさへすれば、正しい

姿勢の方が、疲れなくて樂になります。姿勢を正しくすることは、天地の靈氣を、この肉身に通はせ、久遠の生命を、我が觀心に於いて顯發しようとする用意でありますから、最も正しく、嚴かな坐法を爲すのであります。でも固くなり過ぎると、三十分の時間が大變長く感せられて、疲れを覺えますから、ゆるやかにして、凝りを作らずに、正しく座するのであります。御婦人の御方は、少し厚い座布團に腰を下ろして、足を座布團の外へ出し疊につけてお坐りになると至極樂に坐れます。

二、合　掌

兩手を合せ合掌して、中指の高さを額の中央邊の高さ迄上げます。合掌の指先きは、正しく天を指す方向にむけ、斜にせず、又、合掌を胸まで下げないやうにします。合掌が胸のところまで下り、斜の方向を指して居りますと、又障りなどが現はれる加持祈禱の形式になりますから、合掌が人によつて、多少振れましても其等の憑物とは全然異つて居るといふ自信のもとに、合掌端坐するのであります。十指合掌と申しまして、佛教では、何宗でも合掌を尊んで居ります。佛の印象の中でも、合掌印は特に尊い印でありまして、十界互

具、一念三千を表して居る姿であります。十指は十界とも見られませう。十界は今一つとなつて、一佛界に歸向し、又一佛界の中に、他の十界が悉く具はつて居て、「無始の佛界に、無始の九界を具し」「無始の九界に、無始の佛界を具す」これ則ち「本因本果」なりと示された通り、「神人一如」、「佛凡一體」の神聖なる形相だといふ信念をもたねばなりません。

最近の泰西心靈學者の實驗によりましても、手先から、一種の靈素體、エクトプラズムと稱するものが盛んに流出して居ることが寫眞にまで撮れるやうであります。手掌療法といふのは、これを應用して患部へあてるといふことをやつて居るのであります。

三、呼　吸

瞑目してしづかに鼻より息を吸ふのであります。吸ふた息はスーウと下腹まで吸ひ込み、十分息の入りたる時に上腹（即ち鳩尾の邊り）の息を下腹の方へ呑み落す氣持になります。それには、鳩尾を後方へ吸ひ込むやうなつもりで凹め、同時に下腹を前方に膨らすやうにして、上腹の息を下腹に落すのであります。所謂、臍下丹田に力を入れて下腹に脹り充ち

た感じが起つて來るのであります。而して出來るだけ長く保ち、やがて保ち切れなくなつて、自然に息を吐きたくなつたとき、息を極々しづかに唇を紙一枚ほど開けた間から徐々に吐き出すのであります。これを繰り返して居る中に、端坐と、合掌と、呼吸とが調ふて來て、次第に精神も統一し、雜念の整理が出來て行きます。

四、雜念の整理

精神統一に入らうとつとめて居りましても、フイ〳〵と雜念が湧いてくるものであります何か外界の物音や、話聲などが氣にかゝつて仕方がないときがあります。又、病氣を治さうとして居るのに、治るものかといふ反對意識が起つて來たりします。又自分には罪障はつきものだ、不運はついて廻る。など〻取留めもないことをフイ〳〵と思ひ浮べるのであります。そんなことを思つたらいかぬと、思ひながらも獨りでに湧いてくるので、遂には今日の信行坐は、有難くなかつた、功力も少なかつた、やうにも考へられてくるのであります。そんなときには、よし種々な雜念が湧いて來ても、餘り氣にかけないやうにする。水泡か浮雲のやうに、フト湧いて來てすぐに消えて行くのだ、と大して氣にかけないやうにして、丹田に力を入れることに氣を向けるとよろしい。尙さうした雜念は、吾々の潛在意識にかつて染めつけられた雜念が浮んでくるのでありますから、その雜念のしゆみを拂拭する爲に、心中で經文を唱へます。聲に出さずに、心の中で唱へて、雜念のしゆみを拂つて、正しい信念を燒き付けるのであります。

五、經文の心唱

「南無妙法蓮華經」「如來秘密神通の力」「我此土安穩天人常充滿」「是經は人の病の良藥なり」「一切の病苦離れ、一切の病痛を離れしむ」等の經文を、數回口の中で唱へて、自分の心底に下種するのであります。猶實地について修法して下さい。

六、觀心の妙境

大宇宙の中心として仰いで居た久遠の生命を、今度は自己の中心主體として仰ぎ觀る境地に進んだのであります。久遠生命につゝまれた我、我れが溶け込んだ久遠生命、我れ無くして、而かも妙なる我を發見したのであります。此の信念に確乎不動の自信が出來て來て大安心、無恐怖の信仰を獲得するに至るのであります。

七、注意

此「信行坐」は、唱題行や、讀經行と共に實修してよろしい行法でありまして、決して法謗とか何とか非難さるべきものではありません。一部の特別な人々に對して行はれる有功なる「行法」だと信じて實修したらよろしいのであります。いろ〳〵理窟を並べたり、教義上どうのかうのといふ人は、實修したことのない人々が、何かの爲に反對せんとしていつて居るのでありますから、別段氣にかけずに、永續的に實修して下さい。朝か、晩の寢る前に、二、三十分間實修したらよろしいのであります。神經衰弱や何かで困つて居る人は、直によくなります。精神修養といつても、單に世間にいつて居る講話をきく位では根底がありません。すべて、精神修養でも、治病法でも、招福の道でも、根本から樹立して行かねばなりません。在來の方法ではだめだといふ、迷ひに迷つたあげ句、此の「信行坐」の實修によつて甚大の功力を顯揚せんとするのでありますから、大膽に、確信的に、世評に左右せられずに實修して下さい。私は諸君の幸福と、健康と、安心の爲に是れをおすゝめいたします。これが、私の布施行であります。私は財によつて、世間に功績を殘すことは出來ませんが、此の「法の施」によつて、眞に人類の爲に、國家の爲に、貢献するところは、決して尠くないと確信して疑はない者であります。

治病の原理

「病氣は藥で治る」といふことは、一般民間の信仰であります。ところが「病は藥では治らぬ」と、醫師國島貴八郎氏が

「醫者や藥の力で病が治るものなら、富者の病は早く癒え、貧者の病は暇どることになります。又醫者や藥によらない犬猫草木の病は、決して治癒しないと云ふことになりますが、事實は必らずしもさうでない處を見ましても病を治す力は、醫者にあるものでも、藥にあるものでもないことに氣附かれるであらう。」

と交詢月報（昭和十二年四月號）の中に述べて居られます。

一週間前後には吾々の生命を奪ぶ彼の急性肺炎の如きも、醫者の力や、藥の力によつて治癒

するものでないのでありまして、從つて昔も今も、貧者も富者も、七日乃至八日の日時を要するのであります。今假りに急に惡感がする、戰慄る、熱感を覺えるとします。直ちに醫者を呼ぶ。駈けつけて來た醫者は、「急性肺炎を起しかけて居ります。早く喰ひ止める爲に注射をして置きませう。後から藥を取りに來て下さい。」といつて歸つて行く。食前食後の散水藥は云ふ迄もなく、二三服の頓服を貰つて來る。服用しても後から後へと熱は昇る。咳嗽は出る。咯痰は出る。胸苦しくなる。其處で繰返して醫者を呼び、醫者は型の如く注射を爲し、酸素吸入或は濕布を命ずる。斯うして八日九日と引きずつて居て「熱が下れば大丈夫です。下らなければお氣の毒で御座いますが、これが醫者の常例のやうであります。若し注射、散水藥、酸素吸入、輸血、濕布等と手當を加へた者だけが三日で治癒し、手當の足りない者のみが八日九日と引きずられるのであれば、藥の力にも敬意を拂ふでありませうが、黴菌が五體を冒すと同時に其の身體中に抗毒素が出來て、その力によつて細菌が斃れ、建設力が生じて肺の組織が復舊される。その力悉くが、患者の有つ力から生じてくるのでありますから、その經過に長短がないのであります。」（醫學書）

故に世に特効藥と稱せられるものでも、其の正體は、實は毒物なのであります。黴毒に用ゐる水銀や、六〇六號の主體たる砒素、マラリヤに用ゐるキニーネ、蛔虫に用ゐるサントニン、ヂフテリヤに用ゐるヂフテリヤ血清等、いづれも極量以上に用ゐると人體細胞に對して非常な毒作用を起し、その度を過すと急死せしむるに至るのであります。「毒を變じて藥と爲す」これが特効藥の正體なのであります。水口耕治博士は「凡そ効く程の藥であれば用量が適度を過ぐれば毒となる」といつて居られるのもこのわけであります。

獨逸のハーネマン氏は、ホメオパチー療法を提唱して

「病氣と云ふものは體内生氣の違和より起るのであるから、病を治療しようと思へば、その現在の病氣よりも、同一症狀を一層激しく起す毒物を少量處方すると、その毒物によつて患者の體内に同種の一層大なる違和を生ずるので、その違和を治さうとする「生命力」自體の反動が喚起されて、毒物の一時的に喚起した體内の違和を治す力の餘力が從前の病氣までも治して了のである」といつて居るのであります。

「然らば病は、何で治るか」重大な問題であります。吾等は虚心坦懐になつて、醫者の云ふ所

を聞きませう。

「夫、疾病は、自然に治癒するものなり」

と醫學書開卷第一頁に國島氏は述べて居られます。即ち、病と治す力は、お前達の身體の內にすでに賦與せられて居るのであるといつて居られるのであります。自然良能力こそ、私どもの病を治癒する根本の力なのであります。（本項は光明健康法を參考に資せり）

生命の力こそ、吾等を生かし、吾等の病をも治癒せしめる良醫王なのであります。

でありますから「心を治せば病は治る」といふことは、絕對に動かし得ない眞理であります故に反對の一例として、吾々が、恐怖心と、憤怒心をもつたときに、自分の身體がどうなるかといふことを考へて御覽なさい。

恐怖心や不安の感をもつときには、生理的器官は小さく縮かんで完全な働きが出來なくなります。これが爲に、消化液やホルモンの分泌量は減じて、生理的機能の活潑なる發動が出來なくなつてしまうのであります。

憤怒心は、積極的に有毒物質を肉體の內に作つて身體の害を爲すのであります。憤怒と恐怖

とは病の二大强敵でありまして、この敵を絕滅して常に心を平和に保つやうにすれば、治病上には甚だ効果の顯著なものがあるのであります。醫學博士入澤達吉氏は「眞に病氣を治療しようとするには、對症療法の必要なることは勿論であるけれども、先づ以つて對人療法を試むることが緊切である」と告白されて居ります。庸醫は、病氣を治さうと心がけても、人間全體を即ち其「心」までも治さうとしない爲に、恰も人間を機械の如く見做して、惡い所だけを切つて捨てやうとする治療法でありますから、病氣が治つて人間が死んでしまつたり、或る病氣は治つたが他の病が入れ代つて起きて來たといふはめになるのであります。

「意念」を治すことが、先決問題であり、根本療法であるといふことは、今日では誰も疑ふことの出來ない事事であり、眞理であります。

名醫は、診察する時の態度、藥を與へる時の醫者の態度で、患者に治るといふ信念を喚起せしめて、其の治るといふ信念を藥に附着して與へるものでありますから、藥が効くのであります。治病の極意がこゝにあるのでありまして、更に聖醫になれば、藥も與へないで病的觀念を他に轉換せしめて、病氣を治すのであります。或る醫學博士が、隨分悲觀し切つて病氣の相談

に訪づれた青年を見ると、

「君は煩悶して居るな、そんな事でどうすると一喝を浴びせかけたのであります。其の青年はハッと思つて、成程自分は煩悶して居る。煩悶して居ればこそ、自分自身に宿つて居る全能の治癒力が働かない。それに違ひないと悟つて煩悶を捨てようと、秋晴れの空のやうにカラリと拭はれますと、昨日まで續いた喀血がその日から止まつてしまつたといふことであります。

自己生命の力を信頼しなくてはなりません。自分に宿る生命の力より外に全信頼を捧げるものはない、あれだ、これだと迷つて居るやうでは、全能治癒力の發揮を見ることが出來ません久遠生命を我が己心に發見して、其れより出づる信念力が治癒の偉大なる力となるのであります。久遠のいのちを發見することによつて、無限の生きる力が發揮されて來ます。自分自身の力で立たねばなりません。生命力の無盡藏から、無限大に湧出されてくるのであります。自分の能力ではあるが自分以上の力、本尊久遠生命の力が發現してくるのであります。

すべて「心に肉體を引つかゝらせてはならぬ。」胃が無いと宣告されると、恐怖心の爲に實際その消化吸收能力は減退されます。肩に力を入れると、肩が凝ります。肩の凝るといふのは、

血液が肩に滯つて新しい血液と入れ換らないからであります。とにかく、心が滯る場所に血液が滯るのでありまして、心が頭に滯ると、血液が頭にとゞこつて、不眠症などを起すのであります。すべての病氣は血液の循環の不完全によるのでありまして、黴菌なども血液の循環さへよければ、幾くら侵入して來ても死滅して了ふのであります。で「信行座」によつて治療の功を顯さうとすることも、決して醫學とは反しないのであります。「信行座」の方は「心が滯れば血液が滯る」「心を治せば病氣は治る」といふ信念から治さうとするのでありますし、醫學の方は、心の結果たる症狀を物質の作用で治さうとするものであります。症狀を物質の刺激例へば鍼灸によつて治すのが物理療法であり、藥物によつて治すのが今日の醫學であります。「信行座」では心の自自由自在、神通力を發揮して、治病の功を奏するのであります。「信行座」の實修によつて、心の働きが、自由自在になり、神通を得るのでありますから、心が肺に滯つたり心臟に滯つたりして更に、病氣を恐怖しません。我れの存在すら忘れやうとする。無我、妙我の體驗を實修するのでありますから、病氣の有處も、念頭を拂拭して仕まうのであります。心の迷ひが、病氣の心的原種を植付けるのでありまして、自分の心さへ許さねば、たとへ黴菌と

いへども、身體へ侵入させない位であります。眞に自分の心以外に、自分を病氣にさせるものは決して無いのでありまして、迷ふ思念の爲に、生命の自由自在な發動が失はれて仕まふのであります。久遠の眞理に生き、久遠生命の大智惠を悟り、久遠生命の大慈心を信じ得たる者には、無限能力が自づと體現するのであります。外界の諸天神に祈願をかけて局部の治療を祈るのではなく、己心内の久遠生命を顯現、開發して、心の滯りを拂拭退散せしめ、一切の病ひに迷ふの心を去らしめ、清淨精神、佛我一體の妙境に入り、治病能力を無限度に發揮せしめるのでありますから、病は自づと癒らざるを得ないのであります。神々が、病氣の患部を直接治して下さるといふ迷信は捨てねばなりません。絶對神、久遠佛が、我が己心内奥に發現して、私ども自からが、「病氣無し」「不老不死」の當體なりと、自信が生ずる所に、自然に治癒されてしまふのであります。自分の迷へる思念が、病氣を作つてしまつたのですから、私どもの「意念を治して「病氣無し」、「我病既に癒えたり」の信念を喚起する所に、病は全治してしまふのであります。「此經は人の病の良藥なり」とは法華經の文であります。此の經には、久遠生命顯現の功力をもつて居ります。その功力を發揮すれば自分の天與の治癒能力は、無限度に働き

出すのでありますから、經を聞くことが、讀むことが、即ち良藥を服むことによるのであります。

「若人病あらんに、此經を聞くことを得れば、病即消滅して、不老不死ならん。」

經を聞くこと即、久遠生命の神通力を、我心内に喚起したときには、生命無限の、生きる力治癒の力が發揮されまして、自分で自分の病を治してしまふのであります。壽命終つての死はありません。病は治つてしまふのですから、又、身體の年齢は、年々の老を迎えましても、生きる力、惠まれる歡びが無限でありますから、年老いたりといふ感じは更にないのであります況んや、他の惡靈から障りをうけるとか、惱まされるとかは決して無いのであります。私の觀心に仰ぎ奉る本尊が、最尊無上、唯一絶對の御靈體でありますから、その靈體を感じたゞけで一切の病は治癒されてしまふのであります。百の說明より、一回の體驗です。おすゝめします

から、唱題行を積んで居られる方は、この心構えで唱題行を行じて下さい。未だ唱題行も修行が出來て居ない人は、此の「信行座」の實修から入つて、治癒現證の後に「唱題正行」に進んで下さい。全篇を讀んで下さつたら、この信念は自づと生じてくると存じます。幸福觀にも、

健康法にも、根本的な變革が行はれたことゝ信じます。私どもは、日常病の妄念に煩らはされて居ることが甚だ多いのであります。肺と宣告せられたら、直ぐ不治の病だと絶望し、神經衰弱だといはれては益々神經をいらだて、或は賣藥廣告の記事に、病の惡刺激をうけ、或は醫師の說明に却つて憂念を喚起して、自から悲觀の淵に陷つて仕まうのであります。又生理學の常識に囚はれては、素人判斷で自から病を製造し眞に助からぬ自分になりつゝあるのであります

かゝる病念の捕慮となつて、煩悶に苦しんで居る者が多いのであります。「心を直せば病氣は治る」のでありますから、かゝる雜念、杞憂を拂拭するのが「信行座」による信心の證りであります。信念の持方が間違つて居たら、いくら唱題しても利生はありません。「これで治る」「治して頂けるのだ」といふ强い信念が湧いて出たらもうしめたものであります。病氣は治つたと同樣です。その信念の確立こそ、この「常樂に生きる」一冊の單行本が、貴君に、布施し授與せんとする主眼なのであります。

「信行座」によつてたとへ病が治らなかつたにしても、決してインチキではありません。治らなかつた人の胸に、實際を問ふて見て下さい。何かの爲に、「治る」「治して戴ける」とふ信

念が起つて來なかつたかを自分で自分に問ふて見て下さい。「治る」「治つた」と信じ得られた人は、必らず現證を體驗した人となれるのであます。信じ切れない人があつたら、おたづね下さい、御相談しませう。私は病氣治療の信仰を專門にして居る者ではありませんが。

眞の信仰を與へんと念願して居る者でありまして、其の信念の自然の功力が、治病の力ともなるのでありますから、之を人に御すゝめせずには居られないのであります。私は青年時代に難病の爲に苦んだものです。只今は壯健で、二十年間敎育界に奉職して來ました。それで國民生活の指導、思想善導で、今後も立てばよろしいのであります。併し折角、不治の病でも治るのですから、病む人の爲に福音を御傳へすることは、佛陀のお指圖だと信じて、純正信仰宣布を目的として居る傍ら、治病の功德をも傳へんと念願して居るのであります。

諸君、躊躇することなく「信仰座」を實修して下さい。人生觀も一變し、日常生活に常樂の信念が生れて來ます。治病だけの功でなく、判斷力も增進し、意志の力も强くなります思考力も加はり、重厚の態度が自づと生れてきます。修養法としても最良の方法だと信じて居ります。

開運の工作

人は誰れでも、自分の運命について或る惱みを持つて居るのであります。恐らく十人のうち八九人迄が、あの人は幸運者だといはれるやうでも、自分では決して幸運だとは思つて居ないのであります。幸運な人はその幸運なことを自覺して居ません。所が不幸な人は、世間に自分程不幸な者はない、自分程此の世で苦勞した者はないと、不運不幸の場合のみを擴大して思ひ詰めて居るものであります。多くの人が、自分で自分を見るときは、幸運であつたことを忘れがちで不運不幸のことのみを明瞭に意識して居ります。所がその人が他人の運命を見るときには、不幸の點を見落しがちで、幸福な點のみを、よく摘んで明記して居ります。だから、實際は、どの人でも、さう不幸ばかりが多過ぎる人もなく、又幸運ばかりが多い人も尠いのであります。それに、現在苦よりも、將來がかうならないかと、未來の苦勞に憂いて居る人が多いのでありますから、人間の生活そのものが苦に充ち滿ちて居るやうな氣がするのであります。つ

まり取越苦勞が多いのです。來もしない災厄を、來るものと思つて、一年二年先きの心配を、現在の今日に取越し苦勞をして居るのでありますから、暗い影が何時までも除かれないのであります。計畫上の心勞なら三年五年先きのことも結構でせう。心配ごとの三年先きの取越は、どうしても、久遠の今日に生きて居る人とは思はれません。

私どもは、小さい自分を去つて、久遠生命と共に生きた大人間となつたのであります。無我の過程を通り越して、大我の境地に生き、生かされたのであります。然らば、小さい自分が作るだけの運命でなく、小さい自分の氣のつかなかつた更に大きな運命が拓かれてくるのであります。

即ち「無垢清淨の光ありて、慧日諸の闇を破し」といふ御力と同伴して歩いてゐる自分でありますから、自づと「大清淨の願を起」してくるのでありまして、其の人の「心に念ず」運命も自然に實現されてくるのであります。

觀世音菩薩は、法華經の中に、

「能く無畏を以つて衆生に施したまふ。」

と說かれてあります。「畏れ無し」何といふ剛い言葉でありませう。吾等は、畏れなくともよい、明後日の心配に襲はれて、惱んで居るのであります。自分が立てた運命よりも、更に大な運命が與へられんとして天地が開展して居るのに、それに氣付かず、天運に見捨てられたのだと、近視眼的な心配をして惱んで居るのであります。少しの苦難があつても、それは吾々の魂を練り、人物を陶冶する久遠の教育法でもあらうのに、直に前途を失望し悲歡し、遂には正信を去つて、元の低級信仰に逆戻りする者すらあるのであります。それで何が「不惜身命」の信者なのでせうか「始め信心に入れさせて頂いたときは、有難くて、御利益も頂いたが、今頃は惡るいことばかりが續いて、すつかり諸天善神にも見捨てられてしまつた。こんなことなら一層信心しない方が增しだ、信心して居ても不幸災害が連續する。家内中は病氣が絶えたことがない。商賣は一向に惡行きだ。寶前に「不惜身命」を誓つた信者にも往々かうした疑惑をいだくことがあるのであります。

「念々に疑を生ずること勿れ」

と誡められたのは此處であります。諸君は、今自分の小さな、殼を破る時が與へられたので

あります。小安に滿足した低級信仰より、更に大乘法華の信仰に飛躍せんが爲に與へられた課題なのであります。唱へる經文は、大乘であつても、信仰の心構へが、低級なそれですから、それを今あなたに說き聞かす人が誰もない。そんな宗教家を見付ける時間もなく、又そんな迷雲を開いてくれる書物も見當らない。そこで、久遠本佛は大慈心止み難くして、あなたの心に佛心を觀心省見さすべく、災厄といふ形で、說法教化をせられて居るのであります。だから困つても困り通せぬ程の災害でもなく、又苦しんでも苦しみ切れない程の苦難ではありません。

「波浪も沒すること能はじ」

で、人生の風波いかに荒くとも、我が一生を沒落せしべきものではありません。無畏の信念をもつて人生の航海を突破しなくてはなりません。「忍辱の鎧を着る」ことも必要でせう。

「勇猛精進」して益々積極的に行くことも必要でせう、其の場合は必らず指導が下されます。貴女の周圍は、たとへ皆敵であつても「一毛も損する能はじ」であります。小さいあなたの爲ではないから、二聖、二天、十羅刹女等は、

「擁護して百由旬の内に、諸の衰患無からしむべし」

との誓約をキツト御果しになります。不惜身命の信念を持つ程のあなたであつたら、此の經文は、文字の通りに信ぜられ、現證されて居る筈です。あなたに不惜身命の信念が、ゆるんでしまつたから「諸天擁護」の現證も消えてしまつて、現はれないやうになつてしまいます。久遠生命の功力が、失せたのではなく、それを見る信眼がくもつたのであります。あなただけが見えなくなつたのであります。

「双尋いて段段に壞れなん」

此の經文を空ら事だと思はずに、眞實であると信ぜねばなりません。かく現はるべき場所には、今でも現に證しがあるのであります。「不惜身命」の信眼が開けて居る者には、さう如實に信じられるのであります。

冠鍋日親上人は、義教から、燒き鍋を頭に冠むせられても絶命はしなかつたのであります。双が、双であつても、鍋であつても、石瓦であつても、其の意味に於いて一向差支へはありません。いかなる惡計をめぐらして、人を陷れやうとしても、「還りて本人に著きなん」であります。陷計した人の方が却つて、災ひをうけねばならぬやうになります。さうなれば「悉く即

ち慈心を起さん」で、昨日迄の敵は今日の味方と變るのであります。

「今の世間を見るに、人をよく爲すものは、方人よりも、强敵が人をばよくなしけるなり」が實地に體驗されます。

「疑ふ勿れ」は宗教にとつては、一つの戒であります。無畏の心をもつて臨めば、實に人生は「福壽の海無量なり」でありまして、無限の福と、無限の壽とを創造し得るのであります。

「福德智惠の男を生まん」

「端正有相の女の衆人に愛好せらるゝを生まん」

の經語も、さうした天性の男子、女子を產むとばかりに觀ずして、心に念ずることによつて我が子供を「福德智惠」、「端正有相」の子供に教育し養成し得るものであると信解すべきであります。しからば、吾々の教育事業は「福德智惠」の男子を日々育成しつゝあるのであります又、人相容姿の如何にかゝはらず「端正な女性」「志意和雅」にして愛敬せらるべき日本的女性を養育しつゝあるのであります。これこそ、毎日々々、幾十萬の子供を生みつゝある一大佛事であるのであります。

無垢清淨の光をもつて、慧日の能く諸の闇を破するやうに人生苦の一切を照破し「我が此土は安穩なり」の常樂生活を、うち建てねばなりません。「此の所は即ちこれ道場」でありますす何の災厄がありませうぞ「日々これ好日」であります。何の惡日がありませうぞ、こゝに、「天人合作」、「佛我一體」の大運命が開けて來ます。あなたが、本當に挫折して再起の出來ぬやうな事は、本佛が決してさせてはくれません。あなただけが喰えないやうに神が放つて置きはしません。あなたには、智惠と慈悲と功德力とが與へられてあります。放縱であり怠惰であることは出來ないあなたではありませんか。諸天があなたをよし見捨てゝもあなたは神を見捨てられないやうになつて居るあなたではありませんか。「不惜身命」は、もうあなたの生命に喰込んで居るのであります。さうしたあなたの運命がもし開かれなかつたら、世に運命はないものだと思つてもよろしい、併し未知の運命は斷じてあります。あれば開かれます。「疑ふ勿れ」の心地に住しなさい。私の知る信仰家の中にはこれを實證し得た人が幾らもあるのであります。

五、修養篇

法の言葉（聖語口語譯）

我れ日本の柱とならう。我れ日本の眼目とならう。我れ日本の大船とならうと誓つた願は、破つてはならぬ。

一切の大事の中で、國が亡びるが、第一の大事である。

日蓮は、日本國には第一の忠の者である。恐らく日蓮と肩をならべる人は、先人の中にもなく又後人の中にもあらうとは思はれない。

我が日本國は、一閻浮提（世界中）の內、月氏（印度）、漢土（支那）にもすぐれ、八萬の國々にも

超えた國である。

日本國に、最勝最高の宗教を建立しなくてはならぬ。

世界とは、日本國である。これは領土的にいふのではない、八紘一宇の精神から見ていふのである。

八紘一宇の大理想國家と、四海歸妙の大宗教とは、本然として相一致して居るのである。國家と宗教との冥合は、解釋によつて始めて出來たのでなく、久遠本然の姿なのだ。

世を安んじ國を安んずるのを、忠と爲し孝と爲すのである。法華經の忠孝觀はかく開顯的である。

一切の善根の中では、父母孝養が第一である。日本國の人々を皆養ふ功德よりも、父母一人を養ふた功德の方が猶まさるのである。

人を輕しめると、還つて我身が輕しめられる。不輕菩薩の「我深敬汝等」の精神こそ尊い世の光だ。

鐵は炎打つて劍となる。聖賢は罵詈されて、試みられる。

不用意の一言が、百年の功をやぶる。千年のかるかやも、一時に灰となるやうに。人から謗られる時は、我身の破滅ることもしらずに振舞ふのが凡夫の習である。

文字に囚はれる人を闇者といひ、道理を尊ぶ人を明哲といふ。

水中に石を投げても、何の爭ふことがない。菩薩は水を好く。

錢は、使ひやうで、善ともなり、惡ともなり、また佛ともなる。

禍は口より出て身をやぶり、福は心から出て、我身をかざる。

たゞ世間の留難が來ても、とりあへ給ふな。聖人賢人も此事はのがれ難い。

うれしきにも涙、つらきにも涙である。涙は善惡に通ずる。

現在の大難を思ふても涙、未來の成佛を思ふて喜ぶのも涙である。鳥と虫とは鳴いても涙は出ないが、日蓮は泣かねども涙の絶える暇がない。此の涙は世間の事でなく、たゞ法華經の爲の涙である。甘露の涙ともいふべきだ。

獅子王の如き心をもてる者が必らず佛になる。例へば日蓮の如に。これは憍慢れる心からいふのではない。

經文を餘人が讀むのに、口ばかり言葉ばかりで讀んでゐるが、心には讀んでゐない、又心に讀んでゐても、身をもつて讀んではゐない。法華經は、身と心とに讀むから、尊いのだ。

忍辱の鎧を着、妙敎の劍を提げて起て、人生はこれ聖戰場裡である。

畜生の心は、弱い者をおどしつけて、强い者には恐れる。當世の學者や、宗敎家は畜生のやうだ。

女性は、物に隨つて、物を隨へる身である。

箭のはしるは弓の力。雲の行くは、龍の力だ。此の如に、男のしわざは、女の力である。

聖人は、言葉をかざらない。

父母の恩、一切衆生の恩、國王の恩、三寶の恩、この四恩を知つて報恩しなくてはならぬ。三寶の恩とは佛、法、僧の恩である。

藏の財より心の財である。心の財は積まねばならぬ。

仕官（奉職）することが、法華經の實踐である。世間の政治、經濟、產業も皆、正法（法華精神）と違背しない。

——御遺文より——

淨き心をもつて、言ひ且つ行はゞ形に影のそうが如く、樂は彼に從ふであらう。

怨に報ゆるに怨を以つてせば、怨は永く解ける時がない。怨に報ゆるには愛を以つてしなくてはならぬ、これは古よりの教である。

疎なる屋舍には雨漏の惱みがある。修練せざる心は、愛欲の侵すところとなるであらう。

努力は不死の道で、放逸は死の道である、努力の人に死はなく、放逸の人は、猶死せるに等しい。

いたづらに、他の罪過を責めるより、己が行爲を省みるがよい。

美言も、實行が伴はざれば、花の香を伴はざるが如く、なんの價値もない。

永生を見た人の一日は、見ざるもの〻百年の生にまさる。

寂靜の妙味を味ひ、法悦に生きなば、恐怖もなく、罪惡もない。

愛するも、憎むも二つながら、苦のみなもとである。

言葉品よく、眉目美はしくとも、心邪なれば、それは、善き容貌の人とはいはれない。

―― 法句經より ――

求道心を起すには五つの大切なことがある。一には善き友と交はること、二には怒りの心を無くすること、三には能く教師の教に從ふこと、四には他を憐愍する心と起すこと、五には活潑なる精神を以つて奮勵努力すること。この五つは求道を起す助緣である。

凡そ道に志し正覺を求めんとする者には、左の五つの實踐道がある。第一には徒らに自己を卑下して卑屈なる精神を起さず我が心内には佛性の靈光ありと信じて自信力を持つこと、第二には自身に如何なる困難苦痛をうけても、自己を鍛錬する資料と見て、毫も之を厭はぬこと、第三には活潑なる精神を以つて間斷なく勤勉力行してゆくこと、第四には、人類無量の苦惱を救ふが爲に働くこと、第五には常に佛法僧の微妙なる功德を讃歎して之にあやかることである。

―― 優婆塞戒經より ――

諸の煩惱を盡して、心の自在を得たのである。慈を以つて身を修め、善く佛慧に入つて、大智に通達した。

智深く、志が固い。

言辭柔輭して、衆の心を悅可せしめる。

是の人は則ち如來の使である。如來の所遣として如來の事を行するものである。

我が身命を愛せず、俱無上道を惜む。

我は是れ世尊の使である。衆に處して畏るゝ所がない。

柔和善順。志意和雅。

他人の好惡、長短を說いてはならぬ。

常に嫉、恚、慢、諂誑、邪僞の心を捨てゝ質直の行を修せよ。

是の經を讀む者は、常に憂惱なく、又病痛無く、顏色も鮮白であらう。

其の志念堅固で、大忍辱力がある。

忍辱の心決定して、端正、威德がある。

日月の光明の能く諸の闇を除くが如く、斯の人世間に行じて、能く衆生の闇を滅する。

是の如き人は、世樂に貪著しない。心意質値で正憶念があつて、福德の力もある。是の人は三毒に惱まされない。亦嫉妬、我慢、邪慢、增長慢にも一切惱まされない。

是の人は復、衣服、臥具、飮食、資生の物などには、貪著なく、所願も虛くない。また現世に於いては、必らず福報を得る。

是の經典を受持する者を見うけたら、當に佛を敬ふが如くに恭敬すべきである。

心に歡喜充滿して、甘露をもつて灌がれる如うである。

衆生を愍むが故に、願つて人間として生れて來たのである。

この人は、如來と共に宿するのである。

如來の室に入り、如來の衣を著、如來の座に坐する。

如來の室とは、一切衆生の大慈悲心であり、如來の衣とは、柔和忍辱心であり、如來の座とは、一切法空をいふのである。

―― 法華經より ――

附記

本書の原稿を校正してくれた某氏が、生長の家によく類似して居る點があるやうに思ふと卒直にいつてくれた。成程さういふ點があらう、其の爲に此に一言附記する必要を感じた。私の見る所では、生長の家は、大本教や、クリスチャン・サイエンスや、心靈學や、精神分析學や、佛教の色即是空や圓理實相論や、新暗示法やいろ〳〵のものが、谷口氏といふ一個の天才腕によつて合採されて、而かも獨特の魅力ある表現法によつて成立したものだと思つて居る。でその中心點は、病氣治療や、心理的安心の最も有効なやうに、教說が組織せられて居ると思ふ。法華とも一致し、眞言とも一致し、淨土教とも一致し、キリスト教とも一致し、神道とも一致するといつて、他の成立宗團と一致共通點を見出して、しかも自家生長の家の價値昂揚を計つて居るやうだが、私等は、一致點があるから全同だとは思つて居ない。先づ〳〵法華迹門圓理實相程度の根底に立つて居るやうだ。與へていつても「本中迹」以上は斷じて出て居ない。私が「久遠の生命」といつて稍や類似した表現名稱を用ゐたのは即久遠本佛を指したので、而かも理成無始の古佛でなく、事成久遠の三身即一の如來をいつたのである。これは私が二十年以前に教育的立場を樹立してから少しも變つて居らぬ。其後は如何に流布せんかといふ苦心の上から、教學界に居つてしかも其の方面の研究には怠らなかつのだ。或は、今はつぶれた

常樂に生きる（終）

希望社の門ものぞき、修養團の運動にも時に陪席し、心靈學や、暗示學の研究、及び信仰による病氣治療等は、づつと續けてやつて來たのである。生長の家の書物を讀んだのは最近のことであるが、生長の家の口吻を眞似て、法華經が、生長の家に似て居るのだといふのなれば、生長の家の方が、私に似て居るのかも知れない。たゞ病氣治療に對しては、斷言的に强々しい表現を謹れ憚らず放言して居るのは大いに私の影響をうけた點である。治病原理の一章は、大いに光明の健康法に刺戟せられた。だが私の治療は三十年以前から實施し來つた體驗なのである。

又教理的に觀て、生長の家は多方面のものを取り入れて居るだけ、教理發展の序列がない。從つて深いやうにも辨解が出來るし、又淺い方便門が甚だ多いやうにも見える。まだ〳〵私の見る所では未完成だと思つて居る。强ひて民衆を引きつけて居るのは、表現の平明懇切な點と現世利益の部門であると思ふ。

信仰の相談、健康の相談、煩悶の相談には左記へ、來訪又は書面あれば、回答を申上げます。

大阪府三島郡五領村梶原一乘寺

森川博祐

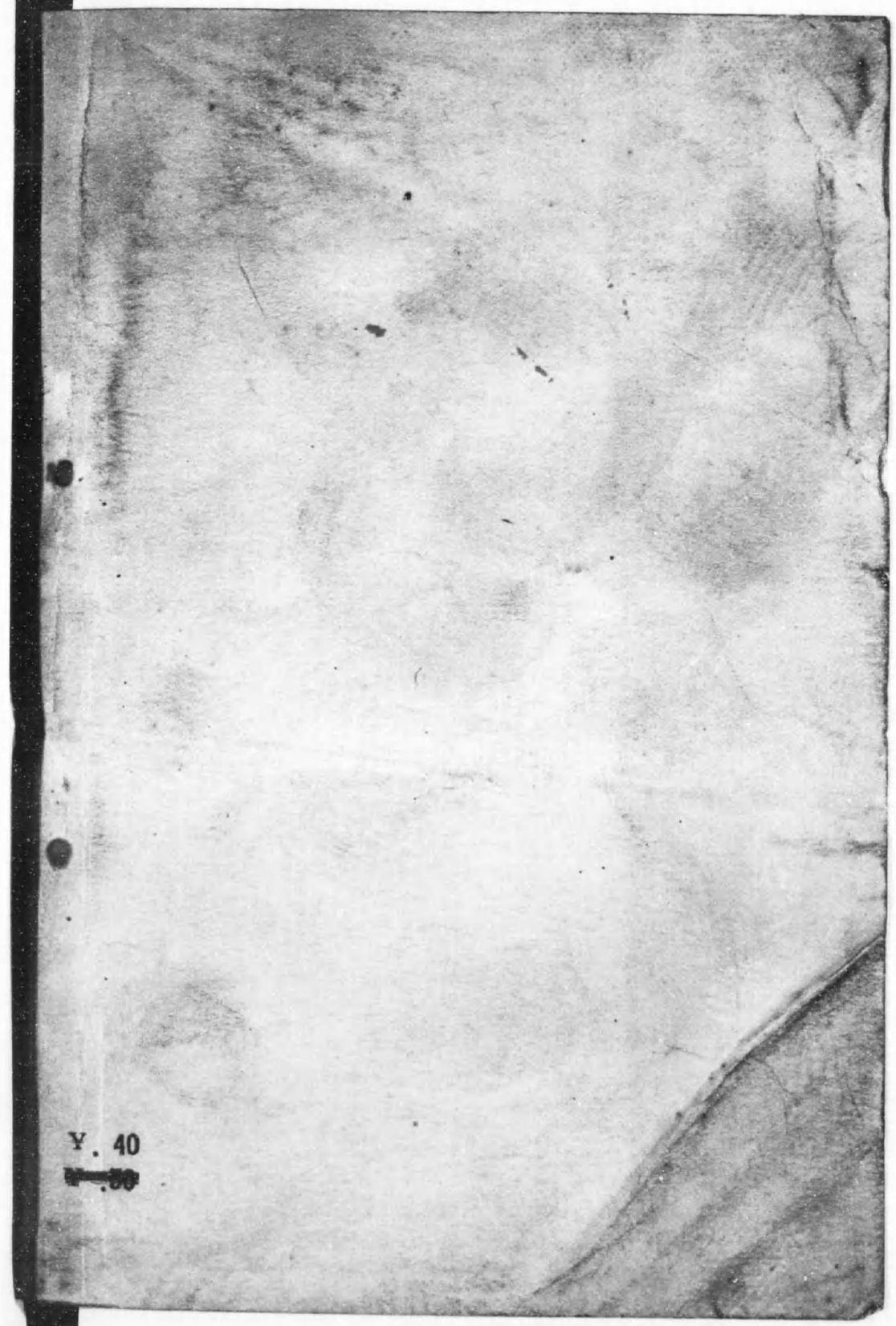
407
427

昭和十五年八月五日　印刷
昭和十五年八月十日　發行

帶樂に生きる（奥付）
定價　金四拾錢

著作兼發行者　森川博祐　大阪市東區大手通二丁目二十九番地
印刷者　溝畑正雄　大阪市東區大手通二丁目十七番地
發行所　一乘會出版部

版權所有

發賣所　大阪市浪速區元町一丁目七四九（賑橋西詰）
朝日屋
電話戎㊻七二一一番
振替大阪二六一四七番

終